

清末小説から 142

2021.7.1

- 吳禱漢訳レールモントフ『銀鈕碑』——日訳「当代の露西亜人」……………沢本香子 1
 - 吳禱漢訳『侠女郎』——押川春浪著「女侠姫」……………荒井由美17
 - 陳景漢訳『侠恋記』——有明山樵『伯爵と美人』……………樽本照雄26
- 清末小説から16、38

★樽本『清末小説四談』を公開しています。ここ約2年間に公表した文章を集めました。本研究会ウェブサイト「単行本」からダウンロードすることができます(無料)。『清末民初小罫

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

吳禱漢訳レールモントフ『銀鈕碑』

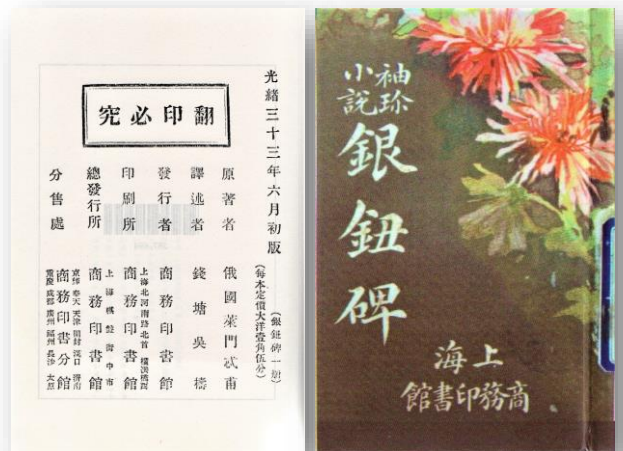
——日訳「当代の露西亜人」

沢本香子

ミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフ
(Михаил Юрьевич Лермонтов、1814-1841)
の作品が吳禱によって漢訳された。嵯峨の家主
人(嵯峨の屋おむろ。本名の矢崎を使用する)
による日本語翻訳を底本とする。だが漢訳本に
日本人の名前は表示されなかった。

吳禱漢訳の底本がわかるまで

俄国萊門忒甫原著、錢塘吳禱訳述『銀鈕碑』
(上海・商務印書館 光緒三十三年(1907)年
六月初版、影印本)は商務印書館の「袖珍小説」
部門に属する1冊だ。阿英は「袖珍小説」叢書
と記している。そうなると「説部叢書」叢書と
書かなくてはならなくなる。表記の重複は避け
たい。ここでは「部門」とした。



奥付 影印本

表紙 孔夫子旧书网より

商務印書館の目録類を見れば該書に角書「言情小説」の表示がある。しかし実際に角書はなかった。同じ例では呉禱訳『薄命花』をあげることができる。その角書「科学小説」はもともと記載がない。

レルモン トフ(萊門忒甫)原著であることは奥付に記してある。そこだけ見れば呉禱はロシア語から漢訳したと考える人がいるかもしれない。しかし呉禱はロシア語を解さない。そのかわりに日本語ができた。

呉禱は日本語作品を底本にして漢訳する。名前が明記されているのは柳川春葉、勃拉錫克(快樂亭ブラック)、高須梅溪、押川春浪、国々[田]山花袋、尾崎紅葉、黒岩涙香、薄田斬雲、中内蝶二、登張竹風、広津柳浪、原抱一庵、上村左川、大沢天仙、長谷川二葉亭(四迷)などだ。

ところがこの『銀鈕碑』には日本人名がどこにもない。原作についても無記載である。

『銀鈕碑』という作品名だけを見て即座に原作を指摘する人はたぶんいないだろう。ただし最近の清末民初小説目録は日本語底本を記載する。積み重ねられた研究結果を吸収し公表しているからだ。そこから出発して作品論をいきなり始める人もいるかもしれない。それはそれでいい。研究者はそれぞれで興味のありどころが異なる。

しかし本稿ではそこに至るまでの過程を無視しない。途中で傾注された原作探索の努力を尊重する。先行文献の助けを得たからこそ探索が可能になったのだ。

ということで呉禱の底本とした日本語訳が判明する経過を復習する。

新聞広告など

『銀鈕碑』が刊行されると版元の商務印書館は新聞に出版広告をだした。参考資料にすることができる。本文部分を翻訳する(略号については樽目録を参照のこと。最新は第13版2021。

広告文の記号は陳大康による)。

[編年史③1306] 『時報』光緒三十三年七月初十日(1907.8.18)「上海商務印書館続出最新六種小説」

《銀鈕碑》：此書為俄國文豪萊門忒甫原著，本名《當代之人物》，蓋欲發揮當代俄人之性質，特假配邱林之于白愛娜事以代表之。訳筆曲折周至，足令閱者尋繹靡盡。洋装一冊，袖珍本式，定價大洋一角五分。

(注：[編年史⑤2457]も同文)

『銀鈕碑』：本書はロシア文豪レルモン トフ原著で原題を『現代の人物』という。現代ロシア人の性質を詳述するため特にペチヨウリンのベエラに対する事柄をかりてそれを代表させた。翻訳は変化にとみ遺漏がない。読者を何度も尽きることなく十分に満足させるだろう。

単行本が出た直後の広告である(登場人物の名前は日本語底本を使用した)。原作が『当代之人物』だと示しているところに注目する。呉禱漢訳にはその記載がないからだ。この箇所は重要である。上の文章を書いた商務印書館の編集者は漢訳の底本を知っていることがわかる。呉禱に近い存在の人ではなかろうか。ただし日本語訳経由の漢訳だとは明記していない。

漢語の「發揮」は翻訳して「詳述する」としておいた。この新聞広告にはもとづく日本語原文がある。底本となった矢崎の文章なのだ。該当する箇所だけを示す。

【矢崎】右は露國の文豪レルモン トフの傑作にして、原名を「當代之人物」と題する小説に御座候、是はレルモン トフが、當代の露西亜人の性質を發揮せんと欲して本篇の主人公たるペチヨウリンなる仮説の人物を仮来りて、其性質の中に露西亜人の性質を活現せるものに御座候 97頁

上の文章を見れば次のことがわかる。日本語の「露国の文豪レルモントフ」「当代の人物」を漢訳して「俄国文豪萊門忒甫」「当代之人物」だ。「特假配邱林〔ペチヨウリンをかりて〕」というのも一致する。「白愛娜〔ベエラ〕」は漢訳そのものから独自に引いた。広告文の執筆者が工夫したとわかる。

なにしろ日本語の「發揮」を商務印書館の広告に使用してそのまま「發揮」である。日本語の「發揮」は能力などを十分示すこと。漢語はそれに加えて「自分の意見などを十分に表現すること」を意味する。漢訳に流用できる単語だ。

さきに指摘しておけば矢崎のこの前書きは呉禱の漢訳では省略されている。以上をふまえれば文案者は上の日本語原文を見ていることがわかる(矢崎の文章はあとで全文を示す)。だからこそ商務印書館が自社の目録に原作あるいは底本を記さなかった理由が理解しにくい。

次に示す書目提要にも「發揮」が使われている。内容は一致するから原文のままにしておく。

[付晩上209]『商務印書館書目提要』1909.九改定7版(付建舟『晚清民營書局発行書目』上冊 哈爾濱・黒竜江教育出版社 2016.12)

袖珍小説(の部)／言情小説 銀鈕碑 一角五分／俄国大文豪著此書借以發揮当代俄人之性質。

ここに角書「言情小説」があるのを見てほしい。くり返すが実物には存在しない角書だ。

「發揮」部分は新聞広告と同じ。版元の商務印書館が出したのだから重複しても不思議ではない。

時間が前後するが『銀鈕碑』刊行以後に雑誌『小説林』が掲載した新書紹介も引用する(本文のみを翻訳)。

「新書紹介」『小説林』第5期 丁未(1907)年七月

銀鈕碑 商務袖珍本 定価一角五分／旅客 赶高加索山中。途過一中尉。適天雪。同宿一農家中。二人閑談。由中尉談前所經歷奇事。女子白愛娜為喀斯皮梯所劫。受傷而死。因將其情人配邱林所給之銀鈕。嵌於墓碑上。故定為書名。

旅人がカウカス山中を急いでいたとき中尉に出会う。雪になり農家に同宿した。ふたりが雑談するうちに中尉が以前に経験した奇妙な出来事を話した。ベエラという女性がカズビイチにさらわれ傷を負って死亡した。恋人ペチヨウリンが与えた銀のボタンを墓碑に嵌め込んだからそれを書名にした。

こちらでは原作が『当代之人物』であることは述べていない。物語の粗筋を書いて紹介にかえた。カフカス(英語のコーカサス)が出てくるからロシア小説だと予測する読者はいただろう。

それにしても『銀鈕碑』という書名の由来を説明しているのは種明かしである。銀ボタンが嵌め込まれた墓碑だから『銀ボタンの碑』という直接的な漢訳だ。短文でありながら小説の最後部分を明記した。説明する必要があるほど『銀鈕碑』という題名が書き手の興味を引いたらしい。この部分だけを取りあげて最後に説明する。ボタンが漢訳者呉禱の創作であると知れば読者は驚くだろう。

後の文学史、目録、叢鈔など

さて先行文献が日訳者と底本をどう記載しているのか。この問題にもどる。

時間の順序でいえば1937年の阿英『晚清小説史』である。

その説明はわずかだ(傍線省略)。「如呉禱、他從日文轉訳了萊芒托夫的銀鈕碑(一九〇七)」

(1937年280頁/1955年184頁)のみ。しかし日本語から転訳したと明記しているところにご注目いただきたい。最初に転訳と書いたことを阿英は後に忘れるからだ。言及しなくなる。

次は1938年の阿英「翻訳史話」がここにくる。しかし実際に読むことができるのは1981年になってからだ。後で説明する。

中華人民共和国になって刊行された阿英目録(1954/1957)は次のように記載する。

【阿英158】銀鈕碑 俄 萊門忒甫 (萊蒙托夫) 著。吳禱訳。光緒三十三年(一九〇七)商務印書館刊。

上の記述は漢訳本の奥付にあるとおりで。カッコ内の萊蒙托夫は阿英が施した。流通する表記を添えた方がわかりやすいという配慮だろう。吳禱が中国で最初に使用した萊門忒甫は普及しなかったということでもある。日訳底本に言及しないのは漢訳本に記載がないからだ。

阿英目録には基本方針がある。創作と翻訳に分ける。翻訳を重視する研究姿勢がよい。作品に記載された事項のみを採録する。単行本のほかに雑誌掲載の作品も目録に収録したのは空前であって画期的な工夫だった。雑誌の時代を反映する新しく正しい方法だ。ただし角書は省いた。また翻訳の原作、重訳(改編)について阿英が独自に注記することはない。逆にいえば、だからこそ圧縮し簡潔な目録1本に結実したとすることができる。

1950年代に出てきたこの先駆的書目は後世に与えた影響が大きい。該目録に収録された(←ここが重要)創作と翻訳の刊行数を指折れば翻訳の方が創作よりも多いことがわかる。もつづいた資料が阿英目録だけなのだから必然的にそういう結果になる。研究者はこの阿英の主張を信じ続けた。阿英目録そのものに問題があることに誰も気づかなかつた。それが事実だ。1998年になって訂正されるまで長年にわたつ

て支持された定説である。それくらいに信頼度が高かった。学界の権威であるといわれる理由だ。それぞれの作品について刊行されたことがわかるだけでも利用価値がある。

『銀鈕碑』の原作は『当代之人物』だと刊行直後に宣伝している。商務印書館の新聞広告で明らかにされたことだ。しかし阿英目録には注記されなかった。その題名が阿英の文章に出てくるのは1961年になってからである。

『銀鈕碑』は阿英編『晚清文学叢鈔・俄羅斯文学訳文巻』(北京・中華書局1961.10)に収録された。「叙例」の「四」に次のように簡単な説明がある。

萊蒙托夫の小説、也很早就有了中訳本。一九〇七年、吳禱訳的《銀鈕碑》，就由上海商務印書館刊行了。這本小説，和契訶夫的《黑衣教士》，同編在《袖珍小説》叢書裏。差不多經過了二十年，全訳的《当代英雄》才繼續出版。(後略)2頁

レールモントフの小説も早くから漢訳本がある。1907年、吳禱が翻訳した『銀鈕碑』は上海商務印書館が刊行した。この小説はチェーホフの『黑衣教士』と同じく「袖珍小説」叢書に収録されている。ほとんど20年を経て全訳『当代英雄』がようやく出版された。

最初に疑問が出てくるのは吳禱漢訳が日本の嗟峨の家主人(矢崎)訳に基づいていることを説明していないことだ。阿英は『晚清小説史』ですくなくとも日本語からの転訳と書いていた。それが抜けている。

同じくチェーホフ著『黑衣教士』も吳禱の漢訳(1907)である。奥付に「原著者：俄国溪崖霍夫、訳述者：日本薄田斬雲、重訳者：錢塘吳禱」と明記されている。日本薄田斬雲訳「黑衣僧」が底本だ。こちらについても薄田斬雲の名前をださない。

両者ともに日本語経由であることをなぜ隠すのか。たしかに『銀鈕碑』には日本人訳者は書かれていない。しかし阿英は転訳だと説明していたのではないか(後述)。しかし『黒衣教士』の実物には薄田斬雲訳だと書かれている。ちぐはぐな扱いである。

20年後の全訳というのは次の書物が該当するだろう(傍点筆者。以下同じ)。

1987 [民外2753] 当代英雄 勒●夢●托●夫●著
楊晦訳/上海 北新書局 1930年5月初版
355頁 28開/長篇小説。據英訳本転訳。
書名原文: Герой нашего времени*1。

楊晦漢訳の底本は英訳本だと説明している。阿英が「全訳」と書いているのは呉禱の漢訳が部分訳であることをこの時点で承知しているからだ。次の文章ではそれ以前だから部分訳であるという認識を示していない。

前述した阿英「翻訳史話」*2がある。

「第二回 萊芒托夫一顯身手 托爾斯泰兩試新裝」と章回小説のような章題がついている。

ここで阿英はレーモントフを最初に中国へ招待したのは呉禱だと書いた。それが『銀鈕碑』である。2万字で完結した物語[用兩万字写完這故事]がほかならぬ『当代英雄』であるという。ここで奇妙な説明だと感じる。何度も言及しているように呉禱漢訳の底本は矢崎日本語訳だからだ。しかも部分訳であることを指摘していない。

阿英は楊晦漢訳『当代英雄』(1930)の冒頭を引用して呉禱漢訳と対比させた。その結論は次のとおり。

兩本対校, 其間有着不少的差異, 会使読者們驚奇。可是一般的說起来, 在初起的翻譯界, 像這樣的差異, 已經不是易事了。當時的翻譯界很有趣, 除掉私人的訳書以外, 書店里往往聘有訳手和潤文的人。先由翻譯

手把流行的書訳成中文。再交把那潤文的人去刪潤, 然後再出書。翻譯手固未必能沒有錯誤, 潤筆者是更不知原文為如何, 幾經改動, 等到印出書來, 簡直不是那麼一回事。這種情形, 在當時的小説里, 記載得很多。吳禱的訳文如此, 已經是很難能的。234頁

兩書を比較対照してその間に少なくない差異があるから読者たちを驚かせ不思議がらせるはずだ。しかし普通に言って初期の翻訳界はこのような差異はすでに珍しいことではなくなっている。当時の翻訳界はおもしろいことに個人の翻訳書以外には書店が往々にして翻訳者と文章修正者を雇う。まず訳者が流行している書物を漢語に翻訳する。それからそれを文章修正者に手渡し書き換えさせてから出版する。訳者はもとより間違わないとは限らないし修正者はさらに原文がどのようなものかも知らない。幾度かの改変をへて書物が印刷されるとまったくの別物だった。この状況は当時の小説では多くあったことだ。呉禱の翻訳もその例にもれずすでに手の施しようもなかった。

阿英の説明によれば呉禱はロシア語原文から翻訳したと誤解しかねない。勝手に翻訳し商務印書館がそれを別人に渡し書き換えさせた。だから楊晦漢訳とは翻訳内容が異なるという結論だ。

呉禱は日訳から、楊晦は英訳から漢訳している。原作は同じだからといって底本がそれぞれ日本語と英語なのだから差異が生じるのは当然ではないか。

しかもくり返すが部分訳であることにも言及しない。阿英の記述は基本的に正しくない。あるいは説明が不十分であるにつけ加える。

阿英にしてこの理解なのかと少しばかり驚く。『晚清小説史』では日本語からの転訳だと書いていたのではないか。そのことをすっかり忘れて

いる。『銀鈕碑』には日本人名がないからといって阿英の説明が正当化されるものでもない。

阿英は最初(1937)から最後(1961)*3まで呉禱がいかなる日本語底本によって漢訳したのか明記しなかった。また部分訳だと明確に書かなかった。阿英はあたかも呉禱が勝手に書き換えたかのように説明したのだ。呉禱にしてみれば濡れ衣を着せられたことになる。

晩清文学研究の権威阿英が断言したから後世まで影響を及ぼすことになった。この説明が国蕊を誤解させたのではないかと推測する(後述)。だからこそ『小説四談』の編集人(阿英の娘婿であった呉泰昌)の責任が問われるだろう。阿英の誤解は訂正する必要があったのだ。

明確な指摘

『銀鈕碑』の底本が嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」であると最初に指摘した文献は何か。筆者の知るかぎり[中日880.012]が早い。

1980[中日880.012] 角書不記、Geroi Nashego Vremeni(1840)、(俄) Mikail Yurievich Lermontov、(日) 嵯峨の家主人(訳); 呉禱(重訳) / 上海 商務 [1911年前版] / 日訳本名為「当代の露西亜人」

そこに示してある“Geroi Nashego Vremeni”はロシア語では前出のとおり“Герой Нашего Времени”と表記する。『我らが時代の英雄』つまり『現代の英雄』である。これを見れば1907年の初版から1980年までの間、矢崎の日訳が底本であったことは一般に知られていなかった。

それを受けて『清末民初小説目録』初版(1988)では次のように記載した。

Y457* 銀鈕碑 / (俄) 萊門忒甫(萊蒙托夫) 著 錢塘呉禱訳 / 上海商務印書館 光緒33.6(1907) 袖珍小説 / LERMONTOV

著「現代の英雄」 / 嵯峨の家主人「当代の露西亜人」 『太陽』1904.4

つづく樽目録第2版(新編1997)では嵯峨の家主人訳を『太陽』雑誌で確認した。それにより「レルモントフ」「10巻5号1904.4.1」を追加している。

さらに樽目録第3版(新編増補2002)で「現代の英雄」に注釈の形で「「ベーラ」部分」を追加する。

「ベーラ」部分は以下の目録に依拠している。

1987 [民外2752] 銀鈕碑 萊門忒甫著 呉禱訳 / 上海 商務印書館 1907年6月初版, 1914年8月4版 87頁 50開(袖珍小説) / 中篇小説。據日訳本転訳。本書即《当代英雄》上部的《蓓拉》

ここでようやく「據日訳本転訳」と表示した。ただし嵯峨の家主人はない。

『現代の英雄』の「ベーラ」に至るまで以上のような経緯があった。漢訳作品ひとつにしてもなかなか手間と暇がかかっている。

嵯峨の家主人

嵯峨の屋おむろ(本名矢崎鎮四郎、1863-1947)は小説家、翻訳家。旧東京外国語学校魯(露)語科を卒業した。二葉亭四迷と交際しツルゲーネフ文学を読んだという*4。

雑誌『太陽』はレルモントフ作、嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」と表示して掲載する。この「嵯峨の家主人」は「嵯峨の屋おむろ」のことだ。なぜだか雑誌掲載の署名は「嵯峨の家主人」であって「屋」ではない。別表記のようだがほかでも使用したかどうか詳細は不明。

レルモントフ『現代の英雄』は1839-40年に発表された5篇の小説を集めて構成される。「ベーラ」、「マクシム・マクシムイチ」、ペチョーリンの日誌「タマーニ」、同「公爵令

嬢メリー」、同「運命論者」である。

矢崎訳「当代の露西亜人」は「ペーラ」部分のみを翻訳した。全訳ではないことにご注意いただきたい。

該翻訳について年譜類での記述は簡潔だ。参考までに示す。

【清水】明治三十七年(一九〇四) 四十二歳/四月、翻訳「当代の露西亜人」を『太陽』に発表。448頁⁵

【杉崎】明治三十七年(一九〇四) 四十二歳/四月、レルモントフ作「当代の露西亜人」(翻訳)を『太陽』に発表。329頁⁶

【叢書】明治37.4.1 「当代の露西亜人」『太陽』、レルモントフ作、嵯峨の屋訳。244頁⁷

いずれも雑誌掲載時の署名「嵯峨の家主人」については記載をしていない(【叢書】は「嵯峨の屋^{ママ}」とする)。

雑誌『太陽』には矢崎の序文がついている。「ペーラ」の梗概を述べる。すでに冒頭の一部は示した。それを含めてあらためて掲げる(ルビ省略。下線は筆者。以下同じ)。呉構はこの「訳者述ぶ」を漢訳しなかった。

【矢崎】右は露国の文豪レルモントフの傑作にして、原名を「当代の人物」と題する小説に御座候、是はレルモントフが、当代の露西亜人の性質を發揮せんと欲して本篇の主人公たるペチョウリンなる仮説の人物を仮来りて、其性質の中に露西亜人の性質を活現せるものに御座候、男主角ペチョウリン(露国士官)が、女主角ベエラ姫(亜細亜人種なる酋長の娘)を、寵愛し、翫弄し、且つ泥履の如く履付るの状態は、如何に露国が、東洋諸国に対する、外交政策と相似たる處有るべき歟、斯る巧妙なる懐柔の伎倆と、斯る冷酷残忍なる性質の、露人

の性質中に存ずるは、彼国の文豪が、早く五十年の昔に於て、能く發揮仕る處に御座候、若我国当代の政治家、外交家、有志、記者、事業家等、此小説を一読して、能く露人の性質を会得し、直覚する者は、露国の政策及び外交を解決し得る事、猶快刀乱麻を断が如くなるべしと存候、読者願はくは此作を以て、軽々に読過し去らざらん事を、伏て冀ひ奉る 訳者述ぶ 97頁

作品「ペーラ」の内容は矢崎が要約(下線部分)したとおりで。ロシア軍人の主人公ペチョーリンがカフカス地方において異民族酋長の娘ペーラを誘拐し来たり「寵愛し、翫弄し、且つ泥履の如く履付(ふみつけ)る」。矢崎はそれを当時のロシアと東洋諸国の関係に置き換えた。そう解説した背景にはすでに始まっていた日露戦争があるのは確かだろう。ロシア人に蹂躪されるペーラに当時の日本を重ねた。

当時のロシア人が抱く異民族に対する軽蔑差別の感情態度を言葉にして露骨に表現している。レルモントフは当時の同世代人から欠陥箇所を集めてペチョーリンを創造し彼が理解するままに描写した。ペチョーリンはロシア人から見れば「現代の英雄」であるかもしれない。ただし「ここにいう英雄とはいまも言うように犠牲者の別名であり」(中村融290頁)という指摘はある。しかし異民族で被害者のチェルケス人娘ペーラにとってペチョーリンは悪漢にはかならない。

矢崎日訳と呉構漢訳

ひとりの旅行作家(姓名不記)がカフカス地方を旅行した。彼はそこに在住する50歳くらいのマクシム・マクシムイチ中尉に出会う。彼はロシア兵駐屯地で1年間一緒にすごした奇人ペチョーリン(25歳前後)というロシア軍士官にまつわる思い出話を問われるままにしゃべった。「ペーラ」と題する1篇はその聞き書きと

いう体裁になっている。異民族の娘ペーラを中心にその弟、彼女に恋する男、それにロシア人ペチョーリンが絡んで物語が展開する。

ロシア人とカフカスの多種民族(タタール[韃靼]はその民族総称)の間には歴史的に複雑な関係がある。それを背景にして物語の最初からロシア人の異民族へ対する強烈な侮蔑が冷静に書かれる(呉禱漢訳の傍線は省略。以下同じ)。

【矢崎】此處等の亜細亞人といふ者は、実に畜生見た様な奴でしてねへ／狡猾な奴等ですよ！ 98頁

【呉禱】這裏各處の亜細亞人。委實是和畜生一般的野奴。／真真是狡猾奸刁的奴才！ 5頁

ここのアジア人は実に畜生と同じく野蛮なやつでしてね。／本当に狡猾な奴らですよ！

ロシアからみればカフカスの人々はアジア人である。呉禱の漢訳は矢崎日訳を直訳している。

【矢崎】彼奴等は何等の仕事をも知りませんねへ、何等の教育にも向ぬ民ですよ、まだ貴君カバルヂンツ人や、チエチエンツ人の方が、餘ツ程此奴等よりは上等ですよ、其は彼奴等は山賊的の貧乏人でこそあれ、其代り自暴自棄の無鉄砲者でさあ、此奴等と来た日には、(中略)真に人夫の外には役に立ぬ奴等ですよ 100頁

【呉禱】這厮們任是什麼事。也不懂得。什麼等級教育。也不曾受過。閣下加巴亭人。和韃靼人。比這厮們。還要高得多。可知這厮們。乃是山賊般貧苦之人。又加自暴自棄。不肯当兵習武。這厮們(中略)真乃除了傭工僱役。毫無用處的蠢才。 12-13頁

こいつらはどんな仕事もしりませんね。どんな等級の教育も受けたことがないので

すよ。あなた、カバルヂンツ人や韃靼(タタール)人の方がこいつらよりはよほど上等ですよ。まったくこいつらは山賊のような貧乏人でね、そのうえ自暴自棄で兵隊になって武術を習おうともしない。こいつらは(中略)本当に人夫のほかには役立たずの愚か者ですよ。

呉禱は輕蔑語の「厮」を使用して日訳を的確に漢訳している。ただし日本語の「無鉄砲者」を漢字に引かれて「不肯当兵習武[兵隊になって武術を習おうともしない]」と誤解した。日訳の「チエチエンツ人」を「韃靼(タタール)人」にした。後にでてくる「チエチエン地方」(100頁)も「韃靼地方」(13頁)である。

マクシームイチの物語には異民族ふたりの若者が出てくる。アザマートとカズビーチという。このふたりが全体を回転させる主要な役割を担う。

ロシア兵駐屯地の近くに帰順した酋長がいた。その息子がアザマートである。その妹がペーラだ。アザマートは金銭と馬に執着し盗みに平気な若者として描かれる。

ペチョーリンはアザマートに冗談半分に言った。マクシム・マクシームイチが語っている。

【矢崎】「如何だ、お前が若乃父の家畜の中、最良の小山羊を一頭窃んで来たならば、俺はお前に金貨を一個やると、所が如何です貴君、翌日の夜彼奴目小山羊の角を握んで牽て来たでは有ません歟、其様欲張りでした、 102頁

【呉禱】「怎麼。你若能將你父親養的家畜之中最好的小山羊竊一頭來。俺立將一個金洋圓給你」呵。你道他如何。第二天夜間。那厮果然握著一頭小山羊的角。牽了前來。你瞧他貪欲大也。 20-21頁

「どうだ。お前がもし父親の飼っている家畜の中で最良の小山羊を盗んできたなら

俺はお前に金貨を1枚やるぞ」。あなた、あいつはどうしたか。翌日の夜あいつははたして小山羊の角を掴んできたのですよ。あいつの貪欲さの大きさをごらんになってくださいよ。

呉構は矢崎が閉じ忘れた記号(」)を正しく用いて直訳している。アザマートのこの欲深さがカズビーチの所有する駿馬と自分の姉ペーラを交換することにつながる。用意周到に作られた物語だ。

転換点の最初になっているアザマートが申し出るその提案部分を引用する。

【矢崎】まあ聴け、俺はお前の為なら何でもしてやる、望みと有ば、自分の姉でも盗み出してやる、姉が如何に踊り、如何に歌ふ歟はお前も知て居るで有らう、縫取りなぞは実に巧いものだけ！あの様な妻は、何処を尋ねたつて有はしない、土耳其帝の妻にだつて有はしない.....如何だ望まない歟？明日の晩、あの谷の滝の處に待て居ない歟、左様すれば俺は隣の部落へ往くと言て、姉を誘ひ出してやる、而して彼傍を通るのよ.....其處へ貴様が飛出せ、姉は直貴様のものだ、如何だ、姉のペエラでも其馬には易られない歟？ 106頁

【呉構】聴著。俺為了你的馬。任是什麼也贈給你。只要能殺遂我願望。就連我姊姊。俺也能竊盜出來給你。俺的姊姊舞得怎樣。歌得怎樣。你是早已知道著。至於鍼滯活計等事。沒一樣不巧妙通靈！那樣妻房。想來也沒有找處。任是土耳其皇帝的皇后。怕也沒得那樣.....怎麼樣。終究沒了望麼？明天晚間。你可在那谷傍泉水處等待麼。若是恁地。俺只說往近鄰部落去遊玩。將姊姊誘騙出來。使他走過你身旁.....你却在那裏跳了出來。俺姊姊從此就屬了你。怎麼樣。難不成俺姊姊白愛娜。也不能換你的馬麼。34-

35頁

漢訳は翻訳しない。なぜなら直訳そのままからだ。記号の「.....」「!」「?」も日訳のままに対応させている。見事な漢語の口語訳になっている。呉構漢訳の見本だ。指摘する箇所はひとつもない。

カズビーチは申し出を断った。そのあとにペチョーリンが同様の誘いをアザマートに仕掛ける。駿馬を自分のものにできる機会を与えてやるというのだ。

【矢崎】宜しい、誓ふとも、屹度お前に得さする、其代りお前とあの馬の代りとして、俺にお前の姉のペエラを得させなければならんぞ、カラギョウツがお前の姉の引出物だ、如何歟此交換がお前の氣に叶つてくれゝば宜が 108頁

【呉構】好好。也要立誓。定要向你得來。並非為別。就是你要那匹馬的酬勞。俺定要得你的姊姊白愛娜纔罷。喀爾鈕齊。乃是你姊姊的筵終贈物(割注：古時賓客赴宴之後各將出物件來互相送贈)。怎麼樣。這個交易。能如你的心願麼。 41頁

よろしい。誓うとも。きつとお前の物にさせてやる。ほかでもない、あの馬の報酬として俺はきつとお前の姉ペエラを手に入れなければならんぞ。カラギョウツはお前の姉の宴会後の贈り物(古代に賓客が宴会に参加した後互いに贈り物をした)だ。どうだ。この交換はお前の願いにかなうか。

「カラギョウツ[喀爾鈕齊]」とはカズビーチが所有する駿馬の名前だ。日本語の「引出物」は祝い事で招待客に配られる贈呈品である。呉構は読者の理解を助けるために説明の注をつけた。ペチョーリンはペーラと駿馬を交換できるものと考えている。レールモントフはそういう風に描写した。それほど常識はずれな人物であ



(左) ベーラ。イスラム教徒の女性でありながら両腕を露出させている不自然さがある



(右) カズビーチがベーラを刺す

ネットから引用

る。またそれを実行することは異民族アザマートにとっては普通のことだとも示唆する。もともと人馬交換はアザマートが提案したことだった。

アザマートは駿馬を手に入れる。窃盗である。ペチョーリンも姉のベーラを手に入れた。誘拐拉致である。

マクシームイチに問われてペチョーリンは答えた。

【矢崎】私は後でペチョウリンに、何故其様悪い事を企てたと言いましたが、彼がいふには「なかに彼様野育のチエルケス娘が、俺の様な優しい夫を持つのは幸福に違ひない、何故なら彼等の習慣からいふと、俺でも矢張夫と言はんければならぬ、其にカズビイチは彼通りの盗賊だもの、其位罰してやらなければ、[]と斯です、 108-109頁

【呉禱】我後來又問配邱林。為何要那樣惡事。他答道。哪。那樣野生的楷爾開斯之女。匹配俺這樣優美的丈夫。難道還說不是幸福麼。再者。他們任是怎樣的風俗習慣。俺恰

不能胡乱。總須称作丈夫。你瞧。喀斯皮梯乃是那樣的盜賊。若不是恁地科罰於他。

..... 42-43頁

私は後でペチョウリンになぜそのような悪い事をしたのかと聞きました。彼が答えていうには、あのような野生のチエルケス娘は俺のような優しい夫と結ばれるのがまさか幸福ではないというのかね。おまけに彼らがどんな風俗習慣であっても俺が勝手にできるわけではないから、夫と言わなければならないのだ。ほれ、カズビイチはあのおりの盗賊だから、もしあいつを罰してやらなけりゃ.....

ペチョーリンがいうには略奪であろうがベーラは自分の妻になることが幸福だ。カズビーチが駿馬を奪われるのは盗賊には当然の罰だ。ペチョーリンは異民族の娘に対する蔑視をむき出しにしている。自己だけを中心とした彼の身勝手てわがままな考えはさすがに登場する同じロシア人をも呆れさせた。レールモントフはペチョーリンをそのような人物に創造したわけだ。

自己中心的なロシア人青年が女性を性的に蹂躪する物語は尾崎紅葉『寒牡丹』(1901)にも見ることができる。それを漢訳しているのは呉禱(1906)であるところが共通する。『銀鈕碑』と呉禱漢訳『寒牡丹』は1年違いのほぼ同時期に刊行された。

駿馬を奪うように言ったのはペーラの父だろうとカズビーチは邪推した。彼はペーラの父親を殺し馬を奪った。また彼はかねてから好いていたペーラを奪還して逃亡した。ペチョーリンとマクシームイチが追跡しカズビーチに向けて射撃したが逃げられた。その際ペーラはカズビーチに肩を刺されて出血している。彼女は駐屯地に運びこまれる。ペチョーリンとマクシームイチに見守られながら彼女は苦しんだ末に死去した。

問題になるのは漢語の「銀鈕」である。銀のボタンという意味だ。ところがそれは原作および底本とした日訳とは異なる。

「銀鈕」の謎

ペーラの遺体を納棺したあとそれに使われた飾り物がある。ここのロシア語原作は次のとおり*8。

マクシームイチが語る。

Я пошел заказывать гроб.

棺桶を注文しに行きました。

я обнял ею гроб и украсил его черкесскими серебряными галунами.
p.103

(織物を)棺桶に巻きつけ、そしてチェルケスの銀モールで飾りました。

棺桶を織物で巻いた。そのうえにチェルケス製の銀モール [серебряными галунами] で飾ったというのが原作だ。「モール галунами」は組みひも、レースでもある。「チェルケス черкесскими」は北コーカサス西部の地名だ。銀モールは恋人ペチョーリンが彼女のために買いためておいたものだという説明がある。

参考のためにこの部分の英訳2例を示す。

【RUSSIAN READER】 and so I went to have the grave prepared. p.102

ということで、お墓の準備をしに行きました。

I covered her coffin, and adorned it with Circassian silver lace p.102

(織物で)私は棺桶を覆い、さらにチェルケスの銀レースで飾りました。

【PHILLIMORE】 I went to make arrangements for her grave. p.84*9

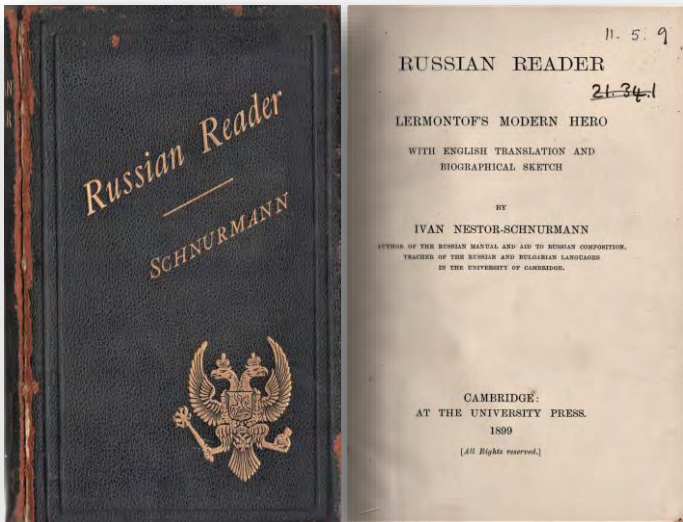
彼女のお墓を準備しに行きました。

I wound round the grave, and I adorned it with the Circassian silver lace p.84

(織物で)私は墓のまわりを巻いて、さらにチェルケスの銀レースで飾りました。

英訳では「grave 墓」と「coffin 棺桶」に分かれた。なぜならロシア語「гроб」には「棺桶」と「墓」のふたつの意味があるからだ。

英訳前者は同一単語を「grave 墓」と



「coffin 棺桶」に適宜分けている。後者は「grave 墓」で統一した。「墓のまわりを巻いて」は少しわかりにくい翻訳である。grave は「墓」「死体を埋める墓穴」「墓所」だが「墓石」を含んでいる。墓石であればそれを布で巻くこともできる。

とりあえず上のように(刊年は異なるが)「墓」にする英訳があることを見ておく。

矢崎は該作品をロシア語原文から日本語に翻訳した。該当する箇所は次のとおり。

【矢崎】私は直墓標を誂ひに参りました
私は絹の小布を少し持て居たので、其で彼女の墓標を纏ひ、尚其上を、曾てべ[べ]チヨウリンが彼女に與し銀のチエルケス紐^{ひも}て飾つて遣ましたが、 121頁

矢崎は rpoб を「墓標」つまり墓碑にした。ロシア語原文に解釈の余地があるという判断だろう。矢崎が旧東京外国語学校でロシア語を学んだという事実がある。そこで得た学識と前後の文脈からして墓標を選んだと考える。

墓標にしたから問題が発生する。「誂ひ(注文し)」に行くとは葬儀屋があるのが前提だ。それにしても簡単に入手できるのか。大きさについても、また石か木かも不明だ。あるいはひとり持ち運びができるくらいに小さいのか。そういういくつかの疑問が出てくるのはしかたがない。棺桶であれば突然の需要に応じることができるように既成のものが置いてあるかもしれない。作者レールモントフはそこまで詳細に書く気はなかった。

参考のために日本語翻訳から3例を示す。

1928中村白葉「わたしは棺を註文に出掛けて行きました。／わたしはタルマラーマ(割注：一種の絹織物。ペルシヤ、トルに産す—訳者)のきれを持つてゐましたので、それで彼女の棺をくるみ、グリゴリー

イ・アレクサーンドロキ"ッチがやはり彼女の為に買つてやつたチエルケスの銀モールでそれを飾りました」64頁*10

1950北垣「で、わしはそのまま棺桶をあつらいに出かけちやつたのです。／こいつ(タルマラーマの切れ)で棺桶をつつんで、チエルケス出来の銀モールでそれに飾りをつけてやつたのです」76頁*11

1981中村融「そのまま棺桶の注文に出かけてしまいました。／それ(ペルシヤ織のきれ)を棺にかぶせ、(中略)チエルケス製の銀モールでこれを飾ってやりました」76頁*12

以上はいずれも棺、棺桶にしている。わかりやすい。

矢崎の翻訳を含めて共通する箇所がある。同一人物(話し手)が棺桶(矢崎は墓碑)を「絹の小布」でつつみ「銀のチエルケス紐」で飾った。この2組の表現は書かれているままに理解できたはずだ。

ところが呉構はこの部分について把握しにくいと感じたらしい。単語を書き換え彼独自の文章を作り上げた。その原因は矢崎が「墓標」「紐」としたところにある。呉構は後者の「紐」という日本語漢字に引きずられた。

棺桶を布切れでつつみ、それに加えて銀ヒモで飾った。そのうえでペーラの遺体を納棺する。翌日、小川のほとりに運んで行って埋葬した。そういう順序だ。矢崎が翻訳したように棺桶のかわりに墓碑が先に出てくるとその手順が乱れる。しかし墓碑が小さいのであればそれでもかまわない。曖昧な部分が残るという意味だ。

以上を参考にして呉構漢訳を見る。呉構は矢崎の日訳を生かしながら独自の修正をほどこした。納得のいく筋道をつけようと苦心している(漢訳にある割注は開く)。

【呉構】没有別法。惟有走過去。向那女子

墓碑之前(割注:墓碑先已建設了)参拝祷告一回。恰好我带着一條絹織小帶。就将来纏在女子墓碑之上。再看上面。早有配邱林給與他的楷爾開斯銀鈕子。嵌飾在那裏。86頁

ほかにどうしようもないので行くしかなかったのです。彼女の墓碑(割注:墓碑はすでに建てられていた)に参拝し祈りをささげました。私はちょうど絹織の細ヒモを1本持っていたのでそれを彼女の墓碑に巻きつけました。そうしてその表面を見ると、かつてペチョウリンが彼女に与えたチエルケスの銀ボタンがそこには嵌めこまれていたのですよ。

矢崎が「墓標」としたから呉禱はそれを「墓碑」と漢訳した。日訳がそうなのだから漢訳は間違いではない。

矢崎訳にある「誂ひに」は「注文するために」という日本語だ。これから購入しようという日本語を呉禱は無視した。そればかりかすでに墓標が立っていることに変更している。突然でくる墓碑では説得力がない。つじつまを合わせるために割注で「墓碑はすでに建てられていた」と加えた。

原作も日訳も名詞と動詞の単語がそれぞれ対応している。「切れで/つつむ」「ヒモで/飾る」の2種類だ。

呉禱は前者の「切れで/つつむ」は無視した。そのかわりに日訳の「絹の小布」を漢訳して「一條絹織小帶[絹織の細ヒモ1本]」と書き換えた。ヒモだから「つつむ」ではなく「纏[巻きつける]」とする。結果として日訳の「ヒモで/飾る」をここで使用したことになる。

矢崎日訳の「チエルケス紐」が残る。この日本語「紐」を呉禱は「鈕子[ボタン]」に置き換えた。

漢語の「紐 niu」は「鈕 niu」と同音だ。しかも「紐」には「ヒモ」と「ボタン」のふたつ

の意味がある。ヒモを結んでボタンにする伝統的なやり方だ(飾り結び)。そこから転用したのではなかろうか。

呉禱は「紐」という漢字に引かれた。漢訳では「ヒモ[一條絹織小帶]」はすでに「巻きつけ[纏]」ている。だから日本語「紐」を漢語「鈕子[ボタン]」に変更した。固形のボタンだから自然に「嵌[嵌めこむ]」という動詞を使用することになる。

呉禱は日本語の漢字に寄りかかって翻訳することがある。時々誤解する理由だ。しかしこのボタンを嵌める部分は呉禱が自分で判断して創造した。独特な解釈である。

ペーラが死ぬ前にペチョーリンは墓碑を用意しそれに銀ボタンを嵌め込んだ。そう改変する方がペチョーリンのペーラに対する深い愛情を示すことができる。小説的により大きな効果があると呉禱は考えたようだ。

呉禱によるせつかくの工夫だが成立しにくい。銀ボタンが引っかかる。なぜボタンなのかという理由がない。ペチョーリンがペーラに銀ボタン1個だけを与えた。愛情の象徴かなにか、記念のためだったというのか。呉禱は説明していないから理解しにくい。しかも墓碑に銀ボタンがあらかじめ嵌めこまれていたことにしたのも無理がある。ペチョーリンが事前にそれを回収していなければ実現できないからだ。話の筋がとおらないのである。

それよりも重大な齟齬があることに気づく。ペーラの墓碑がすでに設置されていたことにした箇所だ。この時点でペーラは死去した直後である。埋葬は翌日に行われる。主の存在しない墓碑を参拝してどうするのか。その矛盾に呉禱は気づかなかった。

ここは矢崎日訳どおりにすべきだった。絹の小布で包み、ペチョーリンが買いためていた銀ヒモ(モール、レース)で飾った。その後には葬られた場所に設置する。そうであってこそ自然だ。

やはり問題になるのは呉禱が墓碑を立てていることにした部分である。

ベーラはイスラム教徒だから土葬にする。埋葬したその上に墓碑を置くのが普通だ。しかし呉禱は割注をほどこして先に墓碑を設置してしまった。河辺に埋葬することを予定して墓碑を置いたと説明するだろうか。少々苦しい。

呉禱の漢訳は基本をいえば日訳に忠実である。これは違いない。ただし小さいところでズレが生じてしまうことがある。それが上の例だ。

呉禱は銀ボタンを創作した。だから彼にしてみれば漢訳題名を『銀鈕碑』としたのは自然な処置だ。しかし矢崎日訳から離れてしまうから具合が悪い。せめて名前を使用した『白愛娜』ならば内容と合致した。また『当代之俄羅斯人』にすれば日訳そのままになったものをと惜しむ。矢崎日訳の「訳者述ぶ」には「当代の人物」も「ベエラ」も出てくる。呉禱がそこを省略したのは彼自身による改変を踏まえてのものなのか。そこはわからない。

呉禱は底本題名を生かした漢訳名を採用する。ただし日訳の「虚無党の女」を漢訳して題名を『薄命花』にした例がある。日訳題名から遠い。そういう題名を見れば『銀鈕碑』が特別に突飛だというわけではない。当時の読者は誰も気にしなかっただろう。

雑誌『小説林』の新書紹介者は題名の由来を書いて関心の高さを表わした。注目される題名には以上のような事情があった。

補 足

呉禱漢訳『銀鈕碑』については阿英が『晚清文学叢鈔・俄羅斯文学訳文巻』の「叙例」で簡単に紹介したことは述べた。漢訳そのものは該叢鈔に収録されている。レールモントフ作品の漢訳が1907年に刊行されたということについては各種目録、文学史などには一般的に触れられる。しかし作品の内容に言及する文章は少ない*13。

連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代巻』(2009)*14第十一章に「第四節 呉禱の幾種名著翻訳」がある。『銀鈕碑』の冒頭を現代語訳である翟松年『当代英雄』(1987)と比較対照するのは方法的に間違っている。ここは矢崎日訳を使用すべきだった。「呉氏の訳文は同様に精彩があり基本的に正確だ[呉氏訳文同様精彩、并且基本正確]」(285頁)と書いても説得力がない。これについては崔琦の指摘がある*15。

たまたま国蕊論文(2016)*16を読んだ。論文題名に呉禱も『銀鈕碑』も含まれない。気づかなかったのはそのためだろう。主題ではないからしかたがない。ただし『銀鈕碑』の内容に一部触れていて珍しいと感じる。その箇所を次に引用する。

最早訳介入中国的“多余人”小説是莱蒙托夫的《当代英雄》，由近代著名訳者呉禱經日文訳述，取名為《銀鈕碑》于1907年出版發行。只是，因為呉禱的大量刪改、使訳作完全脫離了“多余人”主旨而成為一部徹頭徹尾的言情小説。這一方面反映了當時的翻譯風氣，同時也從側面表明呉禱及當時文壇還不具有“多余人”小説的類型意識。43頁

中国に最も早く紹介された「余計者」小説はレールモントフの『当代英雄[現代の英雄]』である。近代の著名な訳者呉禱によって日本語を経て漢訳され題名を『銀鈕碑』として1907年に出版された。ただし呉禱による大量の添削により翻訳を「余計者」の主旨から完全に離脱させ完膚なきまでの恋愛小説にしてしまった。ここには当時の翻訳風潮が反映されており、同時に呉禱と当時の文壇にまだ「余計者」小説の類型意識がそなわっていなかったことを側面から明らかにしている。

「余計者」小説としてレールモントフ『当代

英雄』を取り上げている。問題は下線部分だ。そこを見てほしい。「因為吳禱的大量刪改〔吳禱による大量の添削〕」という箇所である。これはどういうことだろうか。読者に誤解を与えかねない解説だ。

国蕊の説明によれば吳禱がもとづいた日訳底本は『現代の英雄』全訳のように読める。その日訳全訳に対して吳禱は大量に削除し書き換えた。それが『銀鈕碑』だとしか理解できないだろう。ここが奇妙なのだ。

国蕊は日本語を理解する。陳景韓(冷血)作品について日本語底本を明らかにして日本語で論じていることも知っている。

しかし吳禱がレルモンツフ作品を大幅に添削しているという指摘には同意しかねる。

国蕊は重要ではないと考えてか説明をしていない。吳禱の漢訳が嵯峨の家主人の日本語訳にもとづいていると一言触れるべきだった。そうすれば誤解は生じなかった可能性もある。

本稿で明らかにしたように吳禱の『銀鈕碑』はレルモンツフ『現代の英雄』の全訳ではない。「ベーラ」部分を矢崎の日訳によって漢訳した。その部分訳をつかまえて「大量に添削している」というのは当たっていない。それとも「ベーラ」部分も「大量に添削している」というのだろうか。それは違う。矢崎日訳をほぼ直訳している。誤解部分があるにしても漢訳としては上質であることは断言することができる。

ゆえに国蕊論文の結論部分に次のように書くのは間違いだと考える。

“多余人”小説于1907年首次被訳介進中国, 最初經歷了主題改訳、主題弱化等坎坷的訳介路程。46頁

「余計者」小説は1907年に初めて中国に翻訳紹介されたが、最初は主題の改訳、主題の弱化などでこぼこな翻訳紹介の過程を経たのである。

1907年だと特定しているから吳禱漢訳にはかならない。「主題改訳、主題弱化」とするのは書き過ぎだ。そうなった理由は前述阿英の記述が原因ではなかろうか。阿英は吳禱漢訳が日本語にもとづいていたことを途中で忘れた。訳者が勝手に手を加えていたと述べた。阿英の誤解である。国蕊は部分漢訳であった事実を指摘すべきであった。

「ベーラ」部分だけであったとしてもレルモンツフ作品の早期漢訳なのだ。それも上質な漢訳であるとくり返す。清朝末期において吳禱のほかに誰がレルモンツフの該作品を漢訳したというのだろうか。

まとめる。

レルモンツフ作、嵯峨の家主(矢崎)「当代の露西亜人」(『太陽』1904.4.1)が日本で発表された。その全訳が出たのはそれから16年後のことだ。露西亞ミハイルレルモンツフ作、高坂義之訳『現代の英雄/長篇小説』(越山堂1920.4.30。底本はドイツ語。国立国会図書館デジタルコレクション)である。

一方の俄国萊門忒甫原著、錢塘吳禱訳述『銀鈕碑』(上海・商務印書館 光緒三十三年(1907)年六月)は矢崎日訳を忠実に漢訳したものだ。それから13年後に全訳の刊行は俄国萊芒勒夢托夫著、楊晦訳『当代英雄』(上海・北新書局1930.5。底本は英語)が刊行された。

部分訳から全訳までに至るには日本(16年後)中国(13年後)ともにそれくらいの時間が必要だった。以上の中でロシア語原本を使用したのは矢崎日訳しかないのだ。注目すべきだろう。

それぞれに時代の要求がありそれに応じて供給がある。最初から全訳を求めるのは過大な要求だと思う。

清末翻訳界の状況を正しく認識するためには負の側面ではなく正の側面を取り上げるほうが生産的だ。はるか昔の五四時代にあった清末翻訳小説批判から脱却してこそ公平な評価につながる。

□

人名対照表

原文	英訳	矢崎	呉橋
Максим Максимыч	Maxim Maximich	マクシム、マクシムイチ	馬克新馬克新伊梯
Григорьем Александровичем Печориным	Gregory Alexandrovich Pechorin	グリゴウリ、アレクサ ンドルヴィチ、ベチヨ ウリン	格里古利亞歷山大維梯 配邱林
Бзла	Bela	ベエラ (ベエラ)	白愛娜
Казбича	Kazbich	カズビイチ	喀斯皮梯
Азамат	Azamat	アザマト (アザマト)	亜若馬忒

【注】

- 1) 孔夫子旧書網の写真によると俄国葉芒托夫著。
- 2) 阿英「翻訳史話」『小説四談』上海古籍出版社 1981.12。末尾に1938年とある。関連して謝天振「中国翻訳文学史：実践と理論」『中国比較文学』1998年第2期 1998.5.15
- 3) 「翻訳史話」は阿英没(1977)後の1981年に公表された。文末に「1938年」と表示がある。執筆年かと思う。雑誌などに公表されたのかどうか詳細は不明。年からいえば1961年以前に含まれる。
- 4) 柳田泉「嵯峨の屋おむろ伝聞書」『明治文学全集』17「二葉亭四迷／嵯峨の屋おむろ集」筑摩書房1971.11.30。415頁。また『随筆 明治文学 2 文学篇／人物篇』谷川恵一他校訂、平凡社 2005.9.14。296頁
- 5) 清水茂編「年譜」『明治文学全集』17「二葉亭四迷／嵯峨の屋おむろ集」筑摩書房1971.11.30
- 6) 杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ研究』双文出版 1985.2.28
- 7) 野々山三枝「二 著作年表」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第62巻(矢崎嵯峨の屋) 昭和女子大学近代文化研究所1989.6.5 資料編
- 8) IVAN NESTOR-SCHNURMANN “RUSSIAN READER : LERMONTOF'S MODERN HERO” CAMBRIDGE: AT THE UNIVERSITY PRESS. 1899 英露対照
- 9) MIKHAIL IUREVICH LERMONTOV著, JOHN SWINNERTON PHILLIMORE 英訳 “A HERO OF NOWADAYS”, LONDON : THOMAS NELSON AND SONS. LTD. [1920] open library 所蔵
- 10) 中村白葉訳『現代のヒーロー』金星堂1924。初出未見。岩波文庫1928.3.20
- 11) 北垣信行『現代の英雄』日本評論社1950.1.10 世界古典文庫146
- 12) 中村融訳『現代の英雄』岩波文庫1981.4.16
- 13) 魯迅との関係でレールモンツフ『現代の英雄』を説明する次の著作がある。北岡正子『魯迅文学の淵源を探る 「摩羅詩力説」材源考』汲古書院 2015.6.30。309-318頁。ただし当然ながら呉橋漢訳に触れているわけではない。
- 14) 連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代巻』天津・百花文藝出版社2009.11
- 15) 崔琦「呉橋の翻訳活動と日本《太陽雑誌》」『清華大学学報(哲学社会科学版)』2013年増1期(第28巻)、2013。92頁
- 16) 国蕊「“多余人”類型小説的近代移入及魯迅の本土化重構」『魯迅研究月刊』2016年2期、2016。2.29

★

『明清小説研究』2021年第1期(総第139期)

2021.1.15

晚清<新中国伝奇>作者考述 ……羅時進、孫啓華
投其所好・挾其所要——晚清日語訳才転訳小説研究
……汪帥東
“常”“奇”之辨——《海上花列伝》的日常叙事与空
間表徴 ……耿伝明、汪貽函



呉 禱 漢 訳『俠 女 郎』
——押川春浪著「女侠姫」

荒 井 由 美



はじめに

呉禱宣中訳「(冒険小説) 侠女郎」は最初『小説月報』(1913)に連載された。その後、商務印書館の「新訳」本(1915)、「説部叢書」2集本(1915)に収録(後述)。そのほかの版本については樽目録を参照されたい。

その底本は押川春浪「(冒険小説) 女侠姫(ぢよきやうひめ)」である。初出は『少女世界』2巻3-12号(1907.2.1-9.1)連載、後に単行本『(英雄小説) 大復讐』所収(1912)*1。

春浪『大復讐』には4篇の短篇小説が収められている。「(英雄小説) 大復讐」「(冒険小説) 女侠姫」「(探検小説) 幽霊小家」「(巴黎奇談) 老愛国者」(原作は ALPHONSE DAUDET “LE SIÈGE DE BERLIN” 1873)だ。

呉禱は「幽霊小家」を除いた3作品を『小説月報』第3巻10号(1913.1)から第4巻第3号(1913.7.15)に発表した。漢訳名はそれぞれ「大復讐」「侠女郎」「拊髀記」である。「幽霊小家」も呉禱が漢訳して「学生捉鬼記」(未発表)だろうと渡辺浩司は指摘する。正しいと思う。

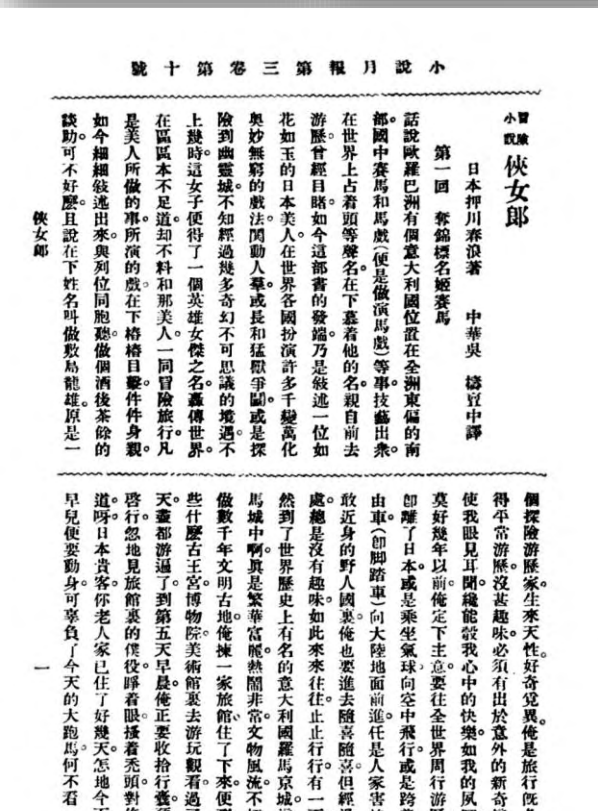
春浪作と呉禱訳

本稿はこの両作品を比較検討する。使用する

版本は略号を使用して以下のとおり。

【春浪】押川春浪「(冒険小説) 女侠姫」
『(英雄小説) 大復讐』本郷書院1912.9.21所収。
国立国会図書館デジタルコレクション所収。欠損部分は『春浪怪著集』第4巻(大倉書店1918.3.15)を参照した。挿絵は『少女世界』より。

【呉禱】(日)押川春郎[浪]著、杭県呉禱訳
『(冒険小説) 侠女郎』8回。表紙はリボン文様、上海・商務印書館、中華民國四(1915)年五月廿六日初版/四年十月十四日再版、説部叢書2集第47編(架蔵)



呉禱漢訳の原作者名が問題だ。最初は正しかったものを後にどういうわけか誤る。

初出『小説月報』では原作者を日本押川春浪と正確に表示している。ところがのちの単行本で押川春郎と誤植する。通音するから「新訳」本に収録する際に誤記した。また「説部叢書」2集でもくり返す。たまにそういうことがある。

押川春浪(本名は方存、1876-1914)、冒険小説作家。雑誌『冒険世界』『武侠世界』で主筆をつとめた。

春浪の作品は中国でも人気がある。陳景韓、包天笑、徐念慈、吳弱男、湯紅絨女士などの漢訳が出ている。

春浪の作品題名は「ぢよきやうひめ」と記すように「女侠/姫」という区切りだ。「女」と「姫」が重なるが侠気のある美女という意味である。それを呉禱が漢訳して「侠/女郎」とした。例をあげれば呉禱訳『侠黒奴(義侠の黒人奴隷)』と同じ。義侠の美少女だから春浪の命名と異なる。文中には「侠女」と書いていることも言っておく。

アラビア数字を用いて各回の回目を対照する。春浪の『大復讐』目次だけ(本文にはない)にはカッコ内にさらなる説明をしているからそれも示す(ルビ省略。一部の繰り返し記号は文字に置き換える。[]は『少女世界』。以下同じ)。

- 1 伊太利の日本美人(競馬場に貴女の騎手が)
第1回 奪錦標名姫賽馬[優勝牌を勝ち取る美女の競馬]
- 2 浪子姫と[の]一万弗(「数千の銀貨を空中へ」)
第2回 散銀幣侠女猶龍[銀貨を散布する義侠の美女は龍の如し]
- 3 陰山の美[しき]少年(短剣を抜き放つて身構へた)
第3回 殲暴客黄衫義憤[暴徒を倒し少年は義憤にかられる]
- 4 幽霊城探検(何だか白いものが動いて)
第4回 探絶陰翠袖单寒[要害を探検して少女は薄衣だ]

5 自然に動く巨岩[石](岩の下から人間の首がスツと)

第5回 走燐火岩石飛空[鬼火が起こり岩石が動く]

6 片眼怪賊と金剛石(絶世の美人を捕へて喰ふ)

第6回 穿隧道金鑽耀彩[トンネルを抜けるとダイヤが輝く]

7 魔境に美しい歌の声(極く淋しい音調で若い女の)

第7回 子夜闘歌名姫出険[真夜中に歌くらべをして美女が危機を脱出]

8 大評判と大歓迎(顛末を数千字の長文電報に)

第8回 国民興頌俠女蜚声[国民は喜び称えて義侠の美女は名をとどろかせる]

呉禱の漢訳は春浪の回目そのままではない。もとの意味をくみながら独自に章回小説風の回目にした。事実第2・7回の最後は「且聴下回分解」と決まり文句だ。「名姫/侠女」「馬/龍」「黄衫/翠袖」「岩石/金鑽」などが対になっている。

春浪原作は雑誌『少女世界』に連載された。そこからわかるとおり少女を主人公にした冒険小説だ。小桜浪子姫の冒険を同行した敷島龍雄(別の個所で高浜という。春浪の書き間違い)が報告する形を取っている。

作品冒頭に小説の粗筋をまとめている。引用する。

【春浪】競馬と曲馬で名高い伊太利国で、私は実に面白い事を見た、之れが此物語の発端で、花の様な日本の一美人が、外国で千変万化の活劇を演じ[、]或は猛獣と闘つたり、或は幽霊城を探険したり、それはそれは不思議な境遇を経て、遂に日本女子の勇名を天下に轟かしたと云ふお話[は] [、]私[は] 図らずも其美人と冒険旅行を共にして、一々目撃した事を、今敬愛する日本の

少年[女]諸君に向つてお話し申すのです。

62頁

【吳禱】 話説欧羅巴洲意大利国。位置在全洲東偏の南部。國中賽馬和馬戲（便是做演馬戲）等事。技藝出衆。在世界上占着頭等声名。在下慕了他的名。親自前去遊歷。曾經目睹。如今這部書の発端。乃是敘述一位如花如玉的日本美人。在世界各国扮演許多千變万化奥妙無窮の戲法。関動人群。或長[是]和猛獸争闘。或是探險到幽靈城。不知經過幾多奇幻不可思議の境遇。不上幾時。這女子便得了一個女英雄之盛名。轟伝世界。在区区本不足道。去不料和那美人。一同冒險旅行。凡是美人所做的事。所演的戲。在下椿椿目撃。件件躬親。今且細細敘述出来。与列位同胞聽。做酒後茶餘的談助。可不好麼。1頁

さてイタリアはヨーロッパの東南に位置しており、国中は競馬と曲馬（曲馬を演じる）などの技芸は抜きん出ている世界で筆頭の名声を占めています。私はその名に憧れて自分で遊歴して目撃したのが今この物語の発端で、花のような玉のような日本の美人が、世界各国で幾多の千變万化、不思議で際限のない手品をやってみせ群衆を騒がせ、或は猛獸と闘ったり、或は幽靈城を探險したり、数知れぬ奇異で不可思議な境遇を経て、遂にその女子は女英雄の名声を獲得し世界に大いに伝えられたことを述べるのです。些細なことながらはからずもその美人と冒險旅行を共にして、おおよそ美人がなした事、演じたことを私は一々目撃し体験しており、今それを同胞諸君に詳細に述べることにいたします。酒茶のあとの話題ともなればよろしいかと。

吳禱は春浪の原文を把握しながら少しの補足説明を加えている。ただし結びの個所を書き換えた。

「今敬愛する日本の少年[女]諸君に向つてお話し申すのです」が原文だ。雑誌が『少女世界』だから読者は「少女」である（単行本で「少年」に変更した）。想定する読者に呼びかけてその文章となった。

ところが吳禱はそれを無視して「列位同胞（同胞諸君）」に置きかえた。これは少年少女を含むといっても苦しい。なにしろ「做酒後茶餘的談助（酒茶のあとの話題ともなれば）」と書き直した。慣用句だといっても一応大人の読者を対象としているのが明らかだ。

児童読み物のままでは不都合だという判断らしい。商務版「説部叢書」は成人、少なくとも文字を読むことのできる人向けの海外文学漢訳シリーズという基本設定だ。そう考えれば書き換えがあっても不思議ではない。ラム『シェイクスピア戯劇物語』を林紓らが漢訳して『吟辺燕語』（1904「説部叢書」所収）になっているのは有名だ。ラム本が児童向けに書かれたことを知る清末の知識人がいた。それを理由に『吟辺燕語』に対する評価は低かったともいう。当時あった偏見に対抗するためにも吳禱なりの工夫をしたと思われる。

「在下（わたし）」を使うところは章回小説風の名残りがあふ。ただ別の個所では「俺」「我」を使うのはほかの漢訳と同じだ。原文の「千變万化の活劇」を漢訳して「扮演／戲法」では「手品」になる。手品のような活動をしたという意味であればかまわない。

また漢訳全体からいえば改行しない。春浪作品で会話を示すカッコを使用せず発言者のあとに「道」を置く。

加筆の例

ローマでの競馬大会に出場するイタリア人リミニー姫と日本人小桜浪子姫を説明する（67頁）。ふたりを対比描写して吳禱は原文にない表現を加筆した。ローマの人々が品評しているというのだ。

【呉禱】大家預先評論他們的長短高下。什麼嫣紅姹紫。魏白姚黃。一個是玉葉金枝。牡丹富貴。一個是鸞儔鳳侶。芍藥風流。6頁

みなは彼女たちの優劣をあらかじめ品評しました。色あでやかな白と黄のボタンとか、ひよりは高貴な家の子女でボタンの富貴があり、もうひよりは夫婦になればシャクヤクの風流があるなどです。

「姚黄」は黄色のボタンをいう。知られているのは「魏紫」で薄紅色のボタンを指す。「魏白」はそれのもじりだろう。原文に美女がでてくれば呉禱の頭の中には自動的にスラスラと漢語の慣用語が噴出するという状態であることがわかる。

春浪の「女侠姫」に対応して呉禱の『侠女郎』が出てくる個所を引用する。

【春浪】天性極めて義侠の心に富んで、強を挫き弱を救ふ事も毎々あるので、女侠姫と云ふ栄名をさへ得て居る由、68頁

【呉禱】又加生来天性。很重義侠之心。最喜鋤強扶弱。扶危濟困。拯救人家艱難之事。也不止一回。因此上。人都尊敬他。加他一個侠女兒名。惹得遠近皆知。無人不曉。7頁

さらに加えて生来の天性で義侠の心を重んじ、好んで強さを挫き弱さを助け、危険にさらされ困難におちいった人を救うなど他人を難事から救助することも度々あるので、人々は彼女を尊敬して義侠の女子と呼んでいることは皆が知っており理解しない人はいないのです。

呉禱は「侠女兒」を使用する。「侠女郎」としてもいい個所だ。「鋤強扶弱」だけだと不安定に感じるらしく同じく4文字の「扶危濟困」

を補う。対句風にしたいらしい。

春浪の原作は児童向けに理解しやすい文章で書いている。呉禱は対象読者を大人に拡大した。原文の大筋は把握しながら成人でも読むに耐えるように表現に手を加えた。文章を装飾したのが呉禱による工夫だという。その結果が漢訳に見える加筆の傾向になった。

日本人礼賛

競馬で優勝した浪子を見て敷島は踊りたくなるほど喜ぶ。



競馬

【春浪】私は日本人で、この外国の土地に來り、数万の外国人の取巻いて居る中で、日本の美はしき浪子姫の勝つたのを見たのですもの、私は本当に日の丸の扇をサツと開いて、踊りだしたくなつたです。71頁

【呉禱】看官可知俺是日本人。來到外邦地界。夾在好幾万外国人之中。親眼瞧見日本美人浪子得了勝。俺怎不要揚揚得意。称雄頭煥起来。覺得滿場無數的人。都隱隱替俺日本国旗争色哩。9頁

読者諸君もご存知のとおり私は日本人で、この外国の土地に來て数万の外国人にはさまれて、自分の目で日本の美人浪子が勝つたのを見たのですから私が得意満面で旗頭になって叫びだすなというのが無理な話で、

満場の無数の人々が私の日本国旗のためにひそやかに競ってくれていると感じたのですよ。

「日の丸の扇」を漢訳して「日本国旗」に置き換えた。同一物ではないが、かといって外れてはいない。

日本女性が本場のイタリア競馬において優勝する。なんと誇らしいことだろう。海外に雄飛して冒険の成果をあげる麗しい女性が主人公だ。春浪の原作はそれを描いて児童に高揚した気分を与えることを目的とする。なにかといえれば日本、日本人を出現させているところにその意図がおのずと露出している。

日本人読者はそれを受け入れるだろう。しかし清末の人々もそうであったとは限らない。ある作家は日本という単語に過剰反応した。たとえば包天笑は日本の破天荒生「空中戦争未来記」にもとづき同名の漢訳を發表した(『月月小説』1908)。原作に出てくる日本を露骨に排除しイギリスに置き換えた事実がある。

そういう風潮が当時の清末に一部存在していた。欧米の原作を日本語経由で漢訳するばあいそれほど問題は生じない。しかし上の「女侠姫」は日本を前面に押し出すからそれについて拒否感を抱く人もいるだろう。

また現代の中国学界には研究者が発言しにくい政治的敏感な空気があるのではないか。「侠女郎」という作品名は挙げてても具体的に内容まで言及する人はいないように思う。

しかし当時の呉禱は頓着しなかった。またそれを雑誌に掲載した商務印書館も気にしなかった。

商務印書館の合併問題

商務印書館といえれば日本の金港堂との合併問題だ。両社は実質約10年間(1903.11.19[旧曆光緒二十九年十月初一日]-1914.1.6)にわたって合併会社となっていた。

呉禱漢訳「侠女郎」が掲載された『小説月報』3巻10-11号(1913.1-2.25)はちょうど金港堂との合併撤廃にむけて交渉していた時期に当たる。金港堂の所有株を商務印書館が買い取る。1株の価格をいくらに評価設定するかという交渉作業には時間がかかる。

該作品はその後、商務版「新訳」(1915.5.26)、「説部叢書」2集第47編(1915.10.14再版)に収録された。まさに完全中華資本に回復したことを宣伝していた最中だった。そのことと日本の作品を「説部叢書」に収録することは別の事柄だと考えられていたようだ。

商務印書館は金港堂との合併解消を記念して「説部叢書」初集本(リボン文様)を再版した(1914.4)。合計100編だ(元版第一集に収録していた日本の『佳人奇遇』と『経国美談』はすでに別作品に差し替えられている)。それに含まれる日本語からの漢訳22種はそのまま継承した。変更はない。

金港堂との合併会社ではなくなったからといって「説部叢書」から日本作品を排除はしていない。2集以降も数は多くはないにしても日本語作品を収録している事実がある。このことは商務印書館と金港堂の合併が双方に利益をもたらした友好的な事業であったことを証明している。もともと対等な合併だったから文字通り両者の協力があって実現したものだ。その後も金港堂の原亮三郎と三井物産の山本条太郎(ふたりは姻戚関係にある)は商務印書館首脳陣との友好的交流を保っていた。

合併破棄の理由は経済的なものではない。あるいは内部で人的関係の対立があったというわけでもない。主として社会的な風潮による。異民族による支配から脱して中華民国が成立した。民国に出現した中華書局は商務印書館に勤務していた人々が抜けて組織した会社だ。商務の内部事情に詳しくあったから日本の金港堂と合併会社であることを攻撃の理由にした。そうするのが有効だとわかっていた。清朝末期に圧倒的に

使用されていた商務印書館編集の教科書だ。それを民国になっても児童に使用させるのか。中華書局はそう主張して商務印書館の教科書を批判した。新聞広告を連日のように打って大々的に宣伝非難したのだ。商務印書館の経済基盤である教科書部門を攻撃されたのだから会社にとっては大打撃である。それが商務印書館をして金港堂との合弁を撤廃する方向に突き動かした。

商務印書館は日本金港堂の資本を回収した。しかしそれとは別に翻訳小説についていえば日本語を経由するものが少なくなっていく傾向の萌芽がすでにあつた。

先に「説部叢書」初集に22種の日本語作品があることを指摘した(そのうち呉構漢訳は6種)。その中で純粋な日本の創作に絞れば7種でしかない*2。ほかの15種は欧米の作品が原作だ。たまたま日本語に翻訳されていた作品だったということだろう。欧米の原作から直接漢訳するようになればわざわざ日本語経由にする必要がなくなる。簡単な理由だ。

ということで呉構漢訳『侠女郎』の公表は商務印書館と金港堂の合弁解消とは直接の関係はないといつていい。

人々に慈善をするためだった。その方法というのは次のとおり。浪子の台詞だ。

【春浪】然し何の様な方法で頒けたら宜いか、何うも餘り面倒な事は好みませんから、いろいろミニ一姫と相談した上、一万弗をば盡く一弗の銀貨に替へて持つて来ました、それをあの広場の側の小高い丘に登つて撒きますから、此街の人々は其下に集り、決して互に争ふ様な事をせず、自分の前に落ちたものをば、天より自分に授つたものと思ひ、それを拾取つて楽しく使つて下さい。80頁

【呉構】但用什麼方法分派纔好呢?若是過於碎煩。又覺不妥。單為這一件。我早已和李小姐商議多次。後來定下万全之計。纔將這一万銀圓。盡數兌下現銀前來。如今咱們就到那空地旁边小山丘之上。將銀圓拋撒下來。你們本街上的人。大夥兒都聚在山丘下面。万不許争執搶奪。只将那跌落在自己面前的。拾取起來。就算是上天賜給你們的。大家快快活活的將去使用罷了。17頁

しかしどのような方法で分けたらよいでしょうか。あまりに面倒であればよろしくありませんから、このことについて私はミニ一さんとなにか相談したうえ万全の方法を決めました。あの1万円を尽く銀貨に両替してきました。今から私たちはあの広場のそばの小高い丘に行つてこの銀貨を撒きますから、あなた方この街の人々はみんなで丘の下で、決して争い奪うあうことなく、自分の前に落ちたものだけを拾い、天より授かつたものと考えて皆で楽しく使ってください。



「数千の銀貨を空中へ」

日本とイタリアの美少女ふたりは競馬の優勝賞金1万ドルの紙幣を持って銀行で1ドル銀貨に両替した。ローマ西南の貧民街で善良なる

今であればこの描写に違和感を抱く人もいるだろう。むき出しの貨幣をばら撒くのはあまりにも品がない。せめて紙幣を直接手渡しするくらいがいいのではないか。

だが明治時代は違ったようだ。慈善の方法と
 いえば一般的にはそれくらいしか考えつかなか
 った。春浪にしてみてもふたりの美女が銀貨を
 撒きちらす方が視覚的に動きがあつてよいとい
 う判断なのだと思う。雑誌の挿絵もそれに合わ
 せて描いている。呉禱もそのまま漢訳している
 から彼にも異存はなかったようだ。

冒険のはじまり

浪子とリミニーを紹介したこの2回までが物
 語の導入部である。敷島はその後ヨーロッパを
 巡りアフリカのモロッコ(摩洛哥)にやってき
 た。道中の汽船でフランス人からモロッコの幽
 霊城で幽霊を見たと聞いてそれを確かめようと
 思ったからだ。

そのフランス人は敷島にむかって「日本の紳
 士高浜君(日本紳士高浜君)」(85頁/21頁)
 と呼びかける。呉禱も訂正せずそのままだ。名
 字が違う。ここは敷島でなくてはならない。ど
 ういうわけか原作者も漢訳者も気づいていない。
 奇妙に思う。もう1ヵ所ある。春浪97頁も「高
 浜」と誤記する。だが呉禱30頁は「先生」を使
 用し誤りを回避した。こちらの間違いは『春浪
 怪著集』579頁で「敷島」に訂正している。

モロッコの山中で遠くに見えたのは馬に乗っ
 た「黒い洋服を着た年若き旅人であった(穿一
 身黒色衣服。也是一位年少旅行之人)」(89頁/
 25頁)。そこにふたりの山賊が出現して襲った。
 敷島は救援のために馬をとばす。若い旅人は武
 芸を心得ているらしく苦戦奮闘しているところ
 に飛び込んだ。活劇部分を分割して対照する。

【春浪】斯くと見るより私はヒラリと馬を
 飛下り、疾風の如く其場に駆け着けて、物
 をも云はず鉄拳握り固め、したゝに一賊の
 横面を拳飛ばし、足を揚げて他の一賊を蹴
 飛ばした、90頁

【呉禱】俺離開還有幾丈來遠。撲的跳下了
 馬。如旋風般跑到那邊。衝入重圍。提起拳

頭。向一個強盜側面打將入去。又飛起一脚。
 踢右首一個強盜。26頁

私はまだ数丈ほど遠かったがヒラリと馬
 を飛び降り、疾風のごとくそこに走りより
 囲いを突破すると拳を振り上げて強盜の横
 面を殴りつけ、片足をあげて右のもうひと
 りを蹴り上げた。

呉禱は「衝入重圍(囲いを突破する)」と加
 筆した。それ以外はほぼ直訳している。

【春浪】この不意の助太刀には山賊共も驚
 いたのだらう、忽ち振返つて私を見付けると、
 今度は美少年の方を捨て、猿の如く喚
 き叫んで左右から私に打掛かつて来るのを、
 私は柔道撃剣には達して居るので、『此様
 な奴、何人でも来い。』と平気であしらひ、
 隙を見て一賊の襟首を引掴み、眼より高く
 差上げて、力任せに彼方へ投飛ばせば其奴
 は空中に筋斗うつて、底も知れぬ谷底の水
 の中へ落込んだ。90-91頁

【呉禱】兩個強盜。出其不意。見少年來了
 救援。不覺吃了一驚。一轉頭瞥見了俺。登
 時撇了少年。一声呼嘯。如猴子叫喊一般。
 兩邊圍困將來。直奔向我。俺素來懂得柔道
 擊劍之術。也不慌張。指著兩人說道。這厮
 們任是誰人。也能打得。兩盜見我心平氣和
 著說話。正在留神細聽。這個檔兒。他們不
 由得稍為疏懈。俺乘著一個空隙。出其不備。
 一把抓住一個強盜的領襟。忒的提將起來。
 高過俺眼角之上。使出氣力一擲。將那厮一
 個筋斗。拋入空中。噹碌碌滾跌到山谷底下
 万丈深淵的河水裏去了。26頁

強盜2人は少年に不意の救援が来たこと
 に驚き、振り返って私を見るとただちに少
 年を捨て、大声で叫ぶと猿のような叫び声
 をあげて左右から私を囲んで向かってきた。
 私はもともとから柔道撃剣の術に通じているの
 で慌てず兩人を指さして言った。こいつら

が誰であろうとやっつけることができるぞ、と。強盗2人は私が平静に話すのを注意深く聞くその瞬間、ふと彼らに隙が生じたから私はそれに乗り意表に出て強盗の襟首をつかみヤッと持ち上げ眼よりも上の高さから力任せに投げつけ、そいつにもんどりうたせて空中に放り出すとワーッと谷底の底も知れない川の中に落ちていった。

呉禱は日本文にない「忒的(ヤッ)」「噌碌碌(ワーッ)」という漢語を補足してより動的な表現を作っている。

【春浪】之を見て他の一賊は、こりや敵はぬと一目散に逃出すを、逃がすものかと背後から突飛ばせば、其奴も谷底へドボンと落込んだ、此谷底は非常に深いから、彼奴等は再び出て来る事が出来ぬだらう。91頁

【呉禱】還有一個。見俺這般擺佈。明知敵我不過。心裏一慌。意欲逃遁。俺翻過身來叱一声你望那裏走。飛起右脚一踢。只聽得撲通一声。也一式無二的落在山谷底下。享受黃泉幸福而去。這山谷底下。非常深沈。那厮們再也不得出現了。26-27頁

もうひとり私のこのやり放題を見てかなわないとわかると大慌てで逃げ出そうとするのを私は身をひるがえして怒鳴りつけ、どこに逃げるか、と右足をあげて蹴りつければこれもドボンと音がして同じく谷底に落ちこんであの世の幸福を享受しに行ったのだ。この山の谷底は非常に底深いからあいつらは再び出てくることはできないだらう。

単に谷底に沈んだというだけではない。呉禱はそこに「享受黃泉幸福而去(あの世の幸福を享受しに行った)」を補足して春浪よりもおもしろい。

動きの多い活劇部分を翻訳して十分だといえ

る。呉禱の見事な漢訳を上引用に見ることができる。

少年とばかり見えたのは男装した小桜浪子だった。



幽霊城探険

浪子がひとりでモロッコに来たのは行方不明になっているリミニを探すためだ。敷島は浪子と一緒に探索する。秘密のトンネルを抜けて幽霊城内に入り込み隻眼の怪獣(片眼怪賊120頁/独眼賊47頁)と闘う(途中で虎に襲われる場面がある。呉禱は春浪原文にない1頁におよぶ長い加筆を行なっている。50頁)。監禁されていたリミニを探し当てて救出した。だが後ろに隻眼の怪獣たちが追いかけてくる。前に虎が待ちうけている。そういう恐怖の窮状を切り抜けての大団円である。

リミニが誘拐された理由というのが奇妙なものだ。敷島の説明は次のとおり。

【春浪】彼等は或る迷信を抱いて、両眼の完全な者でも盡く其一眼を潰し、又た屢ば絶世の美人を捕へ、五十日間果実のみを喰はせて幽囚した後、その美人を殺して肉を喰ふ時には、百歳の寿命を保つと信じて居るので、120頁

【呉禱】他們向來有一種迷信。凡是生來兩眼完全的。個個將一隻眼。硬行毀損。使他

潰爛。単留一眼。又捕捉有姿色の美人。捉去之後。先囚禁五十天。這五十天之内。只許吃食菓子。別的食物。一些也不得上嘴。到了五十天期滿。然後將美人殺了。將肉來吃。吃了美人肉。說是能活上一百歲的長壽。
47頁

「五十天」をくり返して少しくどいがほぼ日本語原文のままだから訳さない。

春浪のいう冒険小説とは怪奇的要素を含んだものだと理解できる。

怪獣の犠牲になりかけたのがリミニーだった。なぜリミニーだったのかという説明はない。春浪の作品を成立させるためには必要な設定だ。たとえばローマの競馬大会で目をつけられたなどの記述を補足して関連づけてもいい個所だろう。無視しているのは不可解である。それともとが児童向けの小説だから理屈は必要とされていないというわけか。

物語の大筋は複雑ではない。行方不明になったイタリアの美人を日本の美女と男性が救助しに行く。それだけのことだ。盗賊、虎、怪物との戦いが活劇的要素を加えて読者を楽しませる。原作者の意図が最初からそうになっている。だから肉体的動きはあるものの物語全体の展開が一本調子で曲折の面白みが減少している理由だ。

春浪原作の不足は置いておく。呉禱の漢訳は加筆気味の傾向はある。成人向けの小説にするために加筆するなど彼なりの工夫をしているのは評価すべきだろう。漢訳もほぼ原文どおりの優れたものだ。 ㊦

人名対照表

春 浪	呉 禱	備 考
敷島龍雄	敷島瀧雄	探険旅行家。別の個所で高浜という
高浜	高浜	日本の紳士。85頁＝呉禱21頁★春浪の勘違いだろう

		97頁の「高浜」→呉禱30頁では省略
小桜浪子姫	小桜浪子小姐	178歳、小桜伯爵の令嬢
リミニー姫	李美宜小姐	178歳、金髪、リミニー侯爵の姫君
ペサロー伯	貝若羅伯爵	貴族で馬主

【注】

1) 参考文献は次のとおり。

岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武俠小説」蘆田孝昭教授退休紀念論文集編集委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店1998.12.12

渡辺浩司『《拊髀記》の原作』『清末小説から』第105号 2012.4.1

目黒 強「明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリテクス——〈お伽小説〉と〈冒険小説〉を事例として」『神戸大学人間発達環境研究科研究紀要』11 (1)、2017.9.30 電字版

2) 書名のみを掲げる。『(偵探小説) 橋英夫』(町田柳塘『橋英夫』、『(科学小説) 秘密電光艇』(押川春浪『海底軍艦』、『(冒険小説) 世界一周』(三宅驥一『世界一周の率先マゼラン』、『(義俠小説) 血蓑衣』(村井弦斎『両美人』、『(写情小説) 鬼士官』(小栗風葉『鬼士官』、呉禱漢訳『(立志小説) 美人煙草』(広津柳浪『美人蓑』、『(政治小説) 珊瑚美人』(三宅彦弥『珊瑚美人』)

次号の公開は2021年10月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

陳景韓漢訳『俠恋記』
——有明山樵『伯爵と美人』

樽本照雄

はじめに

冷(陳景韓)「(多情之偵探)伯爵と美人」
『時報』連載1904.6.12-1905.1.31。未確認
がある。

陳景韓は日本に留学しており日本語ができた。
多くの漢訳は主として日本語作品を底本にした
と考えてよい。

その題名からして使用したのは有明山樵『伯
爵と美人』(1897)だとわかる。陳景韓漢訳の
新聞連載は後に単行本になった。その際改題し
て『俠恋記』(1904)である。

本稿は漢訳『俠恋記』を検討する。その前に
解決すべき問題がひとつある。

作者の有明山樵とは誰か。いかにも筆名だ。
有明には別に『大和撫子』という題名の作品が
ある。

有明山樵『伯爵と美人』と『大和撫子』

刊行年から見れば『大和撫子』(1895)が先
行する。『伯爵と美人』(1897)が後だ。次の
とおり。

1 有明山樵『(探偵小説)大和撫子』50回、
弘文館1895.12.26。奥付は著作兼発行者：西村
富次郎。菊香山人「大和撫子序」明治廿八年十
二月あり。国立国会図書館デジタルコレクシ
ョン所収。以下、注記のないものは同様。

2 有明山樵『(探偵小説)伯爵と美人』50
回、弘文館1897.6.20。表紙は「探偵小説／日
本之偉美人露西亞之貴族／伯爵と美人」。奥付
は著作兼発行者：西村富次郎。天外山人「探偵
小説／伯爵と美人序」明治三十年六月あり(架
蔵)。春江堂 明治42(1909).9.5の表紙は「探
偵小説／伯爵美人」。同じく春江堂1906.6があ
るといふが未見。



上記2種の小説は題名が異なっているだけで
内容は同一である。挿絵も同じ。

ただし「序」の一部および署名と日付が違う。
異同箇所のみを引用する(基本的にルビ省略。
以下同じ)。

『大和撫子』「……開明の徳といふべし
然ればやまと新聞に連載せし大和撫子は
有明山樵の徳にして……」明治廿八年十

二月 菊香山人記

『伯爵と美人』「……開明の徳といふべし然ればこの冊子に載せる伯爵と美人は無名氏其人の徳にして……」明治三十年六月
天外山人記

有明山樵にルビを振って「ゆうめいさんしやう」だ。「さんしやう」は今の表記では「ざんしょ」という訛った話し言葉だと思われる。さかのぼれば「ござんしょ」に戻り、そこから元の意味は「有名でございますでしょう」の筆名になる。ただしそのやや滑稽な筆名が小説内容にふさわしいとは言いにくい。

『大和撫子』序の有明山樵が『伯爵と美人』序では無名氏其人となる。無名氏其人といいながら著者名を有明山樵と明記する。無名氏という意味がない。「序」の年月を変更したのは出版年月に合わせたためだろう。

上の箇所以外は同文だ。すると菊香山人と天外山人は同一人物だということになる。両書の奥付には「著作兼発行者：西村富次郎」とあるのを見ておく。

菊香山人で調べれば採菊散人が見つかる。

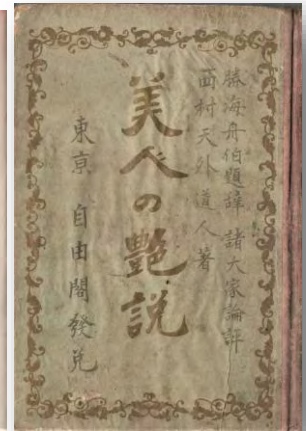
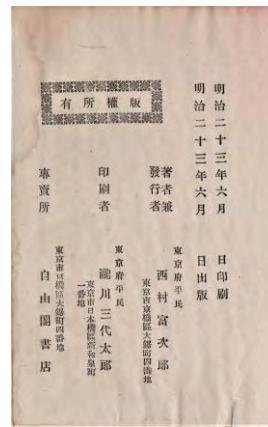
採菊散人『復讐裏見刃』弘文館 明治29
(1896) .2.5。編輯兼発行者：西村富次郎。
序は露の屋菊香記

菊香山人と採菊散人、露の屋菊香がつながる。その大元に西村富次郎がいる。

一方の天外山人で探れば天外道人が出てくる。

西村天外道人『美人の艶説』自由閣書店
明治23 (1890) .6。著作兼発行者：東京府
平民/西村富次郎 (架蔵)

以上の書籍は「著作兼発行者：西村富次郎」で共通する。版元の広文館と自由閣書店は西村の住所と同じだ。



これらを総合すれば、菊香山人=天外山人=西村天外道人となって西村富次郎に帰結する。有明山樵は西村富次郎の筆名と考えてよい。

ここまではよろしい。少し横道に入る。

この西村富次郎は杉山藤次郎と同一人物だとする書目が存在する。

杉山藤次郎と西村富次郎

本名杉山藤次郎、別名西村富次郎と明記する書物である。次のとおり。

村上浜吉著作兼発行人『明治文学書目』村上文庫 1937.4.30/飯塚書房1976.7.10影印 (架蔵)。458頁
藤次郎 杉山藤次郎 【別名】西村富次郎
【号】天外 思海 (以上西村) 花のや紅
南柯亭 南柯亭無筆 (以上杉山)
蛟龍居士

ここには杉山藤次郎の別名が西村富次郎だと記述してある。「号」の部分では西村と杉山に分けるのがやや不可解だ。同一人物であれば号なども一緒にするのが普通だろう。なぜ2系統にする必要があるのだろうか。よくわからない。また西村の号を思海とするが『(古今列国腕力社会)六雄八将論』(明治22)の著者は杉山思海となっている。記述が一致しない。

杉山藤次郎の著作を紹介した横田順爾*1は別

人説を唱えている。2ヶ所から引用する。

(杉山藤次郎) 埼玉県出身、生没年不明。新聞社勤務を経て作家となる。当時(明治十六年～二十年ごろ)東京の神田に在住。本名・杉山藤次郎。号は「蓋世」「奇正」「南柯亭夢筆」「杉山藤」など多数。埋もれた明治小説の先行研究者・石川巖をはじめ、「西村富次郎」という作家と同一人物という記述をしている文献もあるが、おそらく別人と思われる。138-139頁

それで杉山=西村同一人物説は、どうなったかという、やはり別人と考えている。悪くいえば、杉山はしたたかな出版者である西村に、うまく利用されたのだと思う。この推測が正しいか、間違っているかも、今後の研究者に委ねるしかない。190頁

杉山と西村が同一人物であるかどうか。筆者は書物の奥付表記に注目する。

住所から見る杉山藤次郎と西村富次郎

書物によっては奥付に著者などの住所を明記するばあいがある。杉山と西村の住所を抜き出してみる。煩雑なので詳細は注に示した*2。

それらの住所表示を杉山と西村それぞれにまとめると次のようになる。

杉山藤次郎は埼玉県人で最初は東京神田に寄宿していた。

1882-83年、埼玉県人/神田区錦町一丁目十番地鈴木善之助方寄留とある。

1884年に神田区五軒町三番地へ移った。

さらに東京府民となって1886-87年も同じ神田区五軒町三番地である。

一方の西村富次郎はもともと東京府民だ。留吉の名前で1883年、東京府民/西村留吉/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居とある。

同じく1885-86年、西村富次郎の名前を使用して住所は京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

のまま。

1888-90年は京橋区大鋸町四番地に移転。

1890年に京橋区新湊町の加藤勢喜方同居。

1894-97年に京橋区南伝馬町一丁目十四番地へ転居。

1897-99年は日本橋区本石町三丁目七番地である。

以上のとおり杉山と西村の住所は一貫して異なっている。

次の3冊で杉山藤次郎(神田区五軒町)と西村富次郎(京橋区南伝馬町)が併記される。交差点といつていい。

杉山藤次郎(杉山蓋世、南柯亭夢筆)『豊臣再興記：仮年偉業』(自由閣 明治20(1887).12)である。

「著者：東京府平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地」と並んで「出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区南伝馬町一丁目八番地」(自由閣と同一住所)と書かれる。

西村の住所である京橋区南伝馬町は1894年からのはずだ。それ以前の1887年の書籍になぜ出てくるのか。理由はわからない。

次の2冊は筆名で示される。著者兼発行者：西村富次郎と奥付に明記するから著者は西村だと普通は考える。しかしながら実作者は別人という。これは複雑である。

大天狗哲想戯演、小天狗滑文筆記『滑稽哲学・雷笑演説』自由閣 明治21(1888).5.15。著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京京橋区大鋸町四番地(近代書誌・近代画像データベース。画像あり)

近代書誌・近代画像データベースの目録では該書の著者は杉山だと記録する。次のとおり。

杉山藤次郎著、大天狗哲想戯演『滑稽哲学/雷笑演説』東京自由閣発兌 明治21(1888).5.15、著述兼発行人：西村富治郎

これには以下のような注釈がついている。

「書き入れ：見返し「表標題の字ハ久永其頼[キエイ]の筆」「杉山藤次郎といふデモ作者

の記本なり／署名の西村富次郎ハ出版屋の主人／当時これ位の原稿料ハ全篇にて七八円位なりと／杉藤より直接聴けり」「小林清親の画ハ二枚にて三円位の時価なりし」(鉛筆書) 蔵書印：水野(朱陽方印) 本山彦一寄贈(近代書誌・近代画像データベース。画像なし)

大天狗哲想戯演と称して西村富次郎が著述者となっている。そのことについて「書き入れ」た。「杉藤より直接聴けり」だから杉山藤次郎本人に確認したことがわかる。「西村富次郎ハ出版屋の主人」と明記するから杉山とは別人である。

つぎの書物でも同じ例が見える。

題尾外(あごをはづし) 変説、臍野宿替(へそのやどかへ) 筆戯『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22(1889).3.8、著者兼発行者：東京府平民／西村富治郎／東京京橋区大鋸町四番地

近代書誌・近代画像データベースの目録では以下のように記す。杉山を作者と認定して著者名を書き換えている。

杉山藤次郎著『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22(1889).3、著述兼発行人：西村富治郎／発行元所在地：東京京橋区大鋸町四番地「書き入れ：「実ハ杉山藤次郎記述」(鉛筆書・奥付)」本山彦一寄贈(近代書誌・近代画像データベース。画像なし)

著者名はもともとが筆名なのだ。それと奥付に見える著述者西村がまぎらわしい。西村の筆名だと誤解されるだろう。そこで事情を知る人による両書の「書き入れ」があるとわかる。杉山に親しい同一人物の手になるものと思う。

こまごまと述べた。結局のところ杉山と西村の住所が一致しない。別人と考えていい。

というわけで本題にもどる。西村富次郎の日本語と陳景韓の漢訳を見る。

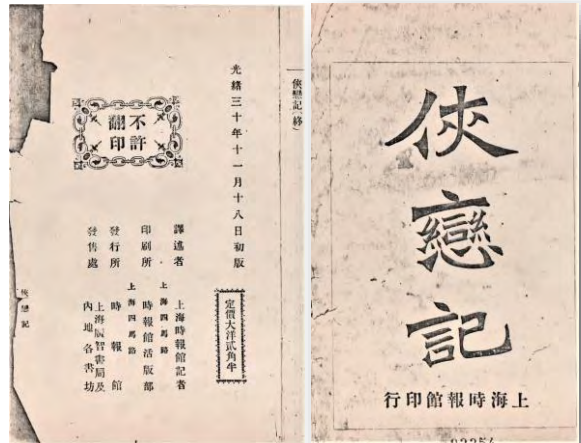
有明山樵『伯爵と美人』と陳景韓漢訳『俠恋記』

本稿で使用する版本は以下のとおり。略号も

示す。

【有明】有明山樵『(探偵小説) 伯爵と美人』50回、弘文館1897.6.20、著作兼発行者：西村富次郎

【陳景韓】上海時報館記者(陳景韓) 訳述『(多情之偵探) 俠恋記』46回、上海・時報館 光緒三十年十一月十八日(1904.12.24)、原作者名不記



有明作品は50回だが陳景韓漢訳は46回という違いがある。内容に合わせて回目を対比させる。

- | | |
|------------|----------------------|
| 第1回 怪しの使者 | 第1回 怪客 |
| 第2回 千圓の手当金 | 第2回 千金之俸
(省略あり) |
| 第3回 世界一美人 | 第3回 絶世美人 |
| 第4回 大夜会 | 第4回 跳舞会 |
| 第5回 不安心な委嘱 | 第5回 強盜(警視總監の性格説明を省略) |
| 第6回 美人の情願 | 第6回 比劍(日本武士道を加筆) |
| 第7回 恋の意恨 | 第7回 入獄 |
| 第8回 決闘の上 | 第8回 決闘の下 |
| 第9回 決闘の下 | 第9回 決闘の上 |
| 第10回 入獄 | 第10回 決闘の上 |

第11回 敵は美人	第8回 美人実 是仇敵	第40回 怪しの 倂	(警視総監宅に監禁されていた青美人は省略)
第12回 王[玉]章	第9回 美人之信	第41回 捕縛	第41回 小林捕縛(省略あり)
第13回 地下の通路	第10回 伯爵之僕	第42回 終局乎否乎	第42回 終局的勝利畢竟是誰?
第14回 伯爵の使	第11回 伯爵者美人之敵	第43回 手術は一つ	第43回 警察長捕虜
第15回 美人の敵	第12回 兩個秘密	第44回 天外声あり	第44回 虚無党(全面書き換え)
第16回 二個の秘密	第13回 妙!妙!	第45回 旅券のお施与	第45回 護照(全面書き換え)
第17回 危機	第14回 危機動	第56[46]回 唯一の目的	第46回 火車(全面書き換え)
第18回 誰だと思ふ	第15回 誰歟	第47回 又候換玉	
第19回 仮粧婦人	第16回 仮装美人	第48回 逢たかりし人	
第20回 捕手	第17回 遭難	第49回 果して船なり	
第21回 思はぬ殺生	第18回 殺	第50回 大団円	
第22回 二度の遭難	第19回 伯爵之使者又来		
第23回 家宅搜索	第20回 搜索家宅		
第24回 伯爵与美人	第21回 伯爵与美人		
第25回 露見	第22回 破綻暴露		
第26回 大事	第23回 美人之使		
第27回 伯爵の素性	第24回 伯爵之来歴		
第28回 疑団氷解	第25回 美人之来歴		
	第26回 小林之来歴(流盼を加筆)		
第29回 頓智	第27回 小林与美人		
第30回 玉換	第28回 死了		
第31回 大不首尾	第29回 玉換		
第32回 車中の会合	第30回 馬車中之秘密談話(上)		
	第31回 馬車中之秘密談話(下)(秘密を加筆)		
第33回 伯爵の正体	第32回 非伯爵		
第34回 美人の素生	第33回 真伯爵		
	第34回 瓦多娘之出處		
第35回 二度の仮装	第35回 囚伯爵		
第36回 宝玉返上	第36回 仮伯爵与真美人(省略あり)		
第37回 金牌の効力	第37回 追…逃		
第38回 美人の捕縛	第38回 金牌之効		
第39回 野心暴露	第39回 美人捕縛		
	第40回 野心勃勃(加筆と省略あり)		

陳景韓漢訳は上で示したように原作者の有明山樵あるいは西村富次郎を出していない。原書にある「序」も省略して物語は始まる。冒頭部分を引用し比較対照する。

【有明】露国聖彼得斯堡は、流石歐洲の大都なり、往来ふ人馳違ふ事、肩相摩し轂相撃つ、雲の如き雑間の裡を、押しつ押しされつ急ぎ往く一個の男あり身の丈さまで高からねど、相貌麗はしく骨格逞ましく、炯々たる瞳と氍々たる鬚漆より黒く、皮膚の色淡く黄なるは、東洋人とそ知られたり。1頁

【陳景韓】却說俄羅斯全國地跨歐亞兩洲。他的京城叫做聖彼得堡。這聖彼得堡在歐洲各大國中。也算是一個數一數二的大都會。休說有事時。就是在平日。也是人山人海。車往馬來。有一日正在熱鬧中。只見急忙忙來了一個偉丈夫。生得眉開眼大。鼻直口方。鬚髮全黑。皮膚微黃。看來却是一個東洋人

種。1頁

さてロシア全土はヨーロッパとアジアの両洲を跨ぎ、その首都はセントペートルスボルクという。このセントペートルスボルクはヨーロッパ各大国の中でも一二を争う大都会である。なにかあった時だけでなく平日でも人は溢れかえり車馬の往来が激しい。ある日この雑踏の中にひとりの偉丈夫が急いでやってきた。眉が開いて眼は大きく、鼻はまっすぐで口は四角、ヒゲと頭髮は真っ黒、皮膚はやや黄色で見るからに東洋人である。

有明のいう「轂相撃つ」とは車輪の中央部分(轂こしき)がぶつかりあうこと。「肩摩轂撃」で往来が激しく混雑している様子をいう。陳景韓はそのまは使わず「人山人海。車往馬來」と言いかえた。漢訳冒頭にロシアの地理的位置を加筆したのと同じく清末の読者に理解しやすいように工夫をしたということだ。

出だしの陳景韓漢訳は逐語訳ではない。しかし日本文の意味を把握した翻訳になっている。

ところが謎のロシア人が日本人徳島顕利(漢訳は小林)に声をかけてからの場面で陳景韓は原文の順序を入れ替える(()に漢訳を示すことがある)。小林についての説明だ。

【陳景韓】他(小林)原是個日本武官。生平最喜探人密事。為人甚是精細。又学得一心武藝。如劍擊相撲等事。件件都精。1-2頁

彼(小林)は日本の武官であって生まれつき探偵することが得意で、人となりは誠に精密にして武芸の心得があり、たとえば撃劍相撲などにもすべて精通していた。

原文の徳島をなぜだか小林に置き換えた。その必要があるのか疑問が残る。「相撲」に漢訳したが原文は「柔道」だ。有明の原文では次の

個所に相当するだろう。少し後に出てくる。

【有明】徳島は胆力あり才気あり、日本特得の撃劍柔道は、ことさらに言ふを用みず、3頁

徳島(小林)についての説明を前に移動させた。その方が理解しやすいと考えたらしい。

こういう独自の処理方法が陳景韓の漢訳方向を示唆している。つまり有明の小説を材料にして陳景韓が自由に翻訳する。別の言い方をすれば原文に近い翻案である。

陳景韓は有明が会話を示すカッコは使用しない。話者に「道」を置いて区別する。当時の漢訳に見られる方法になっている。ただし1カ所だけ「(句)」を使用して会話を示す箇所がある(60頁)。

有明山樵『伯爵と美人』の舞台はロシアだ。スペイン人だと称する美人(ワード嬢/瓦多娘)をめぐるロシア人伯爵と警視総監(警察長)が争奪戦をくり広げていた。その果てに美人は双方から命を狙われることになる。ロシア滞在中の日本陸軍中尉徳島顕利(小林)がそれに巻き込まれた。徳島は格闘技、拳銃、外国語に堪能ないわゆる軍事探偵だ。その彼が伯爵と警視総監の追及を逃れて結局は美人(日本人某子爵とスペイン人の娘)を救い出す。

「探偵小説」と称するがその中身は恋愛小説にほかならない。ただ徳島が探偵風の行動をとって活劇、変装、探偵するからその角書がある。有明の該作品は最初『大和撫子』と題していた。その美女を中心に見たからだろう。ただしそれでは舞台がロシアであるとはわからない。『伯爵と美人』に改題して想像の幅を持たせた。

回数ズレ

先に回目の対照表を掲げておいた。有明が50回で陳景韓は46回だ。漢訳は明らかに原文を省略している。

有明原作の第1回最後の小部分を陳景韓漢訳では第2回冒頭に移動させた。漢訳は最初『時報』に連載されていたから掲載可能字数の関係でそういう処理をしたのかと思う。そこを見れば忠実に漢訳したなら日本語原文より回数が多くなっても不思議ではない。ところが事実には減少している。

例えばロシアの警視總監が徳島に特別任務を依頼した際、探偵社会の合図だといって細工した指輪を渡す(7頁)。漢訳ではその関係部分をすべて削除した。なぜなら有明原作ではその指輪が使用されることはないからだ。そのかわりに後に同じ役割をする「金牌」が出てくる。それを提示すると秘密結社の協力が得られる。陳景韓は金牌を残したが指輪部分については省略した。そう判断したようだ。それは正しい処理だといえる。

警視總監は徳島に指令を与えた。ある美女の関心を徳島に向けさせろというものだ。大夜会で紹介されたのがワード嬢(別の個所では瓦徳嬢/漢訳は瓦多娘)だ。徳島と言葉を交わした彼女は大いに興味を示した。その後、徳島は暴漢に襲われるようになる。

ひとりは見知らぬロシア人だ。剣を用いての決闘に持ち込まれた。陳景韓はその決闘場面(日本語原文に2回分)を大きく圧縮して漢訳した。徳島が短銃を出す場面、剣で決闘中にロシア人が徳島に遺書を書けという場面などは省略する。そのかわりに原文にないものを追加している。日本の「三種特産」という。

【陳景韓】日本国共有三種土産。有了這三種土産。纔撐得住了小小三島。這三種土産。合成來就叫做日本国的國髓。又叫大和魂。這三種土産是什麼。第一件就是擊劍。第二件是柔術。第三件是遊泳。這三件事。無論是男是女。是老是少。是文是武。沒有一人不學。沒有一人不會。學童裡以此三件列入功課。小孩們以此三件當做遊戲。又一種專

精此道中人。另外與他取了一個名字。叫做武士道。這武士道到處受人尊敬。人人視之如嚴師慈父。因此就釀成了通國尚武之風。……13頁

日本には3種の特産がある。それがあるから小さな3島をようやく支えることができる。この3種の特産を合わせて日本の神髓、あるいは大和魂と呼ぶ。それらは何か。ひとつは撃剣、つぎに柔術、最後は水泳だ。老若男女、文人武人を問わず学ばない者はなく、できない者はいない。学童についてこの3件は授業科目になっている。子供たちはそれを遊戯とする。またその道に精通する人がおり別に名前を与えて武士道という。この武士道は至る所で尊敬され人々は厳しい師匠、慈愛深い父として見る。そのため全国に尚武の風を醸成したのである。……

陳景韓は有明の原文にない武士道について説明した。そうする必要を感じたらしい。自分が持つ日本人に関する知識を清末の読者に伝えたかったということか。

徳島を殺そうと後ろから糸を引いていたのはワード嬢だと警視總監は説明した。ワード嬢の秘密をあばいたのが理由だという。スペイン人ではなく日本人であるというのがそれだ。有明はそう書いている。

秘密というからロシア政府転覆計画とか皇帝暗殺あるいは虚無党に関するものかと思うだろう。ところが美女の出自にすぎない。さらに後にはワード嬢が徳島に直接説明して彼女にはふたりの敵がいるという。伯爵と警視總監だ。先に警視總監が徳島に解き明かしたのは虚言であった。敵に狙われる彼女にとって頼りにできるのは同じ日本人の徳島をおいてはいない。ふたりは双方から押し寄せてくる妨害を排除してロシア脱出をめざす。

有明は小説をあくまでも恋愛関係という限ら

れた範囲内に設定している。『伯爵と美人』はそういう恋愛小説なのだ。

小説の大筋は以上のとおり。

日本語原作と漢訳を比較対照しながら読んでいくと原文はまったく一致しているわけではない。

次のような改変もある。徳島がワード嬢の元を辞して秘密の通路を抜けていた。前方から伯爵の使者が来た。それと争い倒した。といても使者が格闘の際に誤って自分のナイフで自分を刺した結果だ。

死体を処置したあと別の伯爵の使者がやって来る。有明の原作では横道に身を隠す。「二度目の使者は神ならぬ身の、斯とも知らで過ぎ去りぬ」(75頁)。使者は徳島に気づかず通り過ぎワード嬢のところへ行行った。

ところが陳景韓は「小林当時。又對準伯爵的家人一鎗。登時又将家人打死(小林はその時また伯爵の使者に狙いをつけ発砲し、たちどころに殺してしまった)」(40頁)。これでは徳島(小林)は殺人鬼ではないか。陳景韓の漢訳はやり過ぎだ。

有明原作では伯爵の使いは2人いる。ミチイルとアルコスだ。ミチイルは徳島と闘い死んだ。だから2人目のアルコスがワード嬢に連絡をとりに来た。

だが陳景韓はふたりとも殺してしまったから原作には存在しない3人目の使いを寄こしたことに変更する。その名前もいい加減につけた。ミチイルを斯登にするのは違うだろう。もうひとは古柏と適当な命名だ。ただし部分的な改変であって大筋が違ってくるというものではない。

陳景韓が細かな改変によってなにを強調したかったのか。ロシア人を無慈悲に2人も殺す日本人徳島という印象操作をしたかったと推測するくらいだ。

ワード嬢は伯爵と結婚の約束をしていた(85頁)。陳景韓はそれを漢訳していない(44頁)。

作品名になっている『伯爵と美人』はその婚約がもとになっている重要要素である。ここの漢訳は不十分である。財産と貴族に憧れて野心を持ったがそれが今は心変わりしてしまったというワード嬢の告白なのだった。それを漢訳しないから伯爵と美人の関係が不明確で読者には伝わらない。

ただし別の個所では手を抜いてはいない。伯爵はロシア皇帝の叔父でワード嬢とはドイツで知り合った。

【有明】瓦「伯爵が妾に向つて我と同伴に露国へ行けば、正妃にして遣らう、すると汝は皇族になられるのだ、何もむづかしい事はない、日本の華族の娘といへば、露国の公主に申立てても、決して差支はないといつてね」92頁

【陳景韓】伯爵自見我後。便要和我。同回俄国去。許我說。到了俄国。便立我为正妃。做了箇伯爵夫人。也没点辱了我。48-49頁

伯爵は私と会ったのち一緒にロシアへ行こうといいました。私に約束してロシアに行けば正式な妃にするし伯爵夫人になるのだから決して恥ずかしくはないと。

ワード嬢の話を聞いている徳島は彼の考えを口にする。

【有明】苟しくも日本帝国に生まれた婦人が、歐洲三界をまごついて、猿のやうな連中に、甘々と首尾好く誑かられたり玩具になつて居る話しを謹聴する訳ですもの 93頁

『伯爵と美人』は日露戦争が起こる以前の作品だ。その当時から有明にはロシアに対する侮蔑の感情があったらしい。陳景韓はこの部分は漢訳していない。

陳景韓が武士道について加筆したことは紹介

した。次のような加筆もある。ワード嬢が徳島に委細を説明してふたりでロシアをあとにすることに決めた。その時、ワード嬢は徳島に流し目を送る。

【有明】夫人は流眇にじつと中尉の顔を見遣りぬ、中尉の胸は轟けり、その何の故なるやは中尉自分も知らざるべし 96-97頁

「流眇(ながしめ)」が使われる個所だ。原文わずかに2行半という部分を陳景韓はなんと漢訳1ページ強も分量を増している。

【陳景韓】瓦多娘此時両眼全神都注在小林の面上。説完之後。便將両眼向下沈了一沈。転眼来又向小林転了一転。兩個眼珠剛轉到了右眼的眼梢上。左眼的眼頭上。遂又慢慢的沈了下去。這一転古書上有個名目就叫做流盼。(以下略)

ワード嬢はこの時全神経を集中して両目を小林の顔に注いだ。話し終わると両目を下にちょっと沈めるとまた小林に目を転じるのだった。ふたつの眼球は右眼の目じり、左眼の目がしらに転び、ついにはゆっくりと沈んでしまった。この動きを古書では名前がついていて流し目という。(以下略)

省略した部分では説明がつづく。すなわち流し目には4種ある。恨盼、怨盼、恋盼、流盼と称してそれぞれを詳細に解説するわけだ。小説の大筋とは関係がない。

陳景韓の考えでは恋愛小説なのだからこういう部分にこそ描写を強化しなければならないということだろう。それで日本語原文にないものを加筆した。ここはすでに翻訳ではなく翻案である。

加筆の例はまだある。伯爵と警視總監が秘密の会話を行なう。馬車の中というのが慣習だと説明がある。

陳景韓はその車中の密談という個所に食い込む。密談をなぜ警察長のところで、あるいは伯爵邸でやらないのか。はたまた野外の秘密家という方法もあるではないか、と。

【陳景韓】其秘密的事。分為二類。其一為形質上的秘密。如体格相貌衣服名刺等類。其一為意思上的秘密。如書信言語。……62頁

その秘密は2類に分かれる。ひとつは形質上の秘密でたとえば体格、相貌、衣服、名刺などをいう。もうひとつは精神上の秘密でたとえば書信、言語である。……

こういう悠長な秘密談義をほとんど2ページにわたって長々と続ける。有明の小説ではロシア伯爵と警視總監が日本人の徳島を殺そうと密談する緊迫した場面だ。その勢いを大きく損ねる陳景韓の加筆であると言わざるをえない。

大筋は踏まえながら陳景韓は自由に細かい変更をし長短の文章を加える。あるいは省略をする。この翻訳姿勢が最後まで続くかと思われた。

ところが大いなる変化、すなわち書き換えが最終部分に生じている。有明原作7回を陳景韓は3回に短縮する。しかも内容を全面的に置き換えるのだ。

結末部分を創作する

それは有明「第44回 天外声あり」を漢訳「第44回 虚無党」にした個所から始まった。

有明第44回で警視總監に捕らわれていたワード嬢を徳島が救助する。徳島とワード嬢は一旦隠れ家に逃れた。徳島は伯爵に面会しロシアを出国する旅券(護照)を出すように要求する。その条件に警視總監がワード嬢に惚れているという情報を告げた(第45回)。だが旅券は拒否された。一方で伯爵は警視總監がワード嬢を隠していると考え彼に引き渡しを直接談判する(第56[46]回)。徳島は金牌を手に援助を求め

るが果たせず警官に取り囲まれた。得意の変装で警官になりすましてその場を離脱する(第47回)。大夜会に遭遇しそれに参加したある紳士に会う。こちらは金牌の効力によって旅券2人分を依頼することができた(第48回)。旅券を手にした徳島と美佐子は汽船で脱出する手はずだ(第49回)。徳島は追跡してきた警視總監と警官隊に追い詰められた。闘いに勝った徳島は汽船にいる美佐子とともにスペインから日本へと帰還した(大団円)。

徳島が警官隊と闘う大立ち回り場面が最後まで連続する。汽船がロシア脱出の方法となっていることを確認する。

陳景韓は回目を「虚無党」に変更した。そこから彼の意図がうかがえる。政治的な要件を小説に持ち込もうとした。そこが日本語原作と異なる。

有明『伯爵と美人』は恋愛小説だ。一貫してワード嬢をめぐるロシア伯爵と警視總監による争奪戦を物語の基本に据える。敵から美佐子を守るために実際に行動するのが徳島中尉の役割だ。宮廷内の醜聞あるいは虚無党とはもともと関係がない。原作のここを押さえておきたい。

陳景韓はそういう有明の執筆方針に最後になって異を唱えた。ただの乱闘で終わるのに不満を覚えたということかもしれない。そこで彼独自の筋展開を行なう。

小林(徳島)とワード嬢は一旦隠れ家に逃れた。伯爵がどれほど権力を持っているかを陳景韓が自ら説明する。ほとんど同年齢のロシア皇帝よりも3倍もある。しかもふたりの仲は悪い。皇帝に対抗するために虚無党に入党した。警視總監はその秘密を小林に探らせようとしたのだった(第44回)。

ここで虚無党が出てくる。皇族の一員が虚無党員であるという陳景韓の奇想天外な思いつきである。小林は出国のための旅券を必要としていた。例の金牌所有者も虚無党であった。そこで伯爵に脅迫状を送り虚無党だという秘密を暴

露されたくなければ旅券を発行しろ、と命じた。伯爵はそうせざるをえない。旅券を入手した小林とワード嬢はシベリア行きの列車に搭乗した(第45回)。

旅券が発行されたことを知った警察長(警視總監)は追っ手を水路と陸路のふたつに分けた。ふたりを乗せた列車を発見したが間に合わず取り逃がした。その列車の酔っぱらった罐焚きが火力を異常に高める。機関手がそれを咎めるとケンカになった。そうしてふたりとも列車から転落してしまう。列車に乗っていた兵士たち、囚人たちはそれを知らない。機関手のいない列車は駅に停車せず突っ走るままだ(第46回)。暴走する車中にある小林(徳島)とワード嬢はどうなるか。

【陳景韓】那小林瓦多娘兩人胸中。自是快樂。但這火車後來。到了那裡去。到了什麼時候纔停。至今尚無下落。91-92頁

小林とワード嬢の胸中ではもともと楽しいものだった。しかしこの列車はこれからどこに行くのか、いつになったら停車するのか。今にいたるも不明のままである。

陳景韓の書き換えは格闘場面を大いに省略した。有明の大団円に比べるとその結末は読者の意表を突く。小林とワード嬢の乗った暴走列車の結末を知らないというのだ。これは現実を超越しており恋愛小説の枠を大きく外れる。見方によればこれはこれで成立しないわけではない。対比するために有明の最後部分を示す。

【有明】船は直ちに錨を抜き、航海幾日、天晴れ浪穏かに、めでたく西班牙に着きしかば早速美佐子が伯母を尋ね、居ること数日、二人は又も打連て、日本への便船に搭じたり、十余年見えざる父上、いかに待詫ておはすらん、相見ん時の嬉しさを、かねてより胸に描けば、自から色に頭はれ、美

佐子の顔は春の如し、胸に描ける音に父上のみならんや、美佐子は夜毎何をか夢む、覺来る暁中尉を見ては羞ろめりとぞ 178 頁

有明の結末は絵にかいたような大団円であることがわかる。これを見れば陳景韓の提出した結末が異常であって明らかに恋愛小説風ではない。

陳景韓の『俠恋記』は原作をほぼなぞって漢訳するところから始まる。途中で字句を加筆し翻案の要素を持ち込む。ところが最後部分をまったく創作して全面的に取り換えてしまった。

これでは純然たる漢訳ではない。かといって翻案にしては原作の大筋を外している。では創作かといえば最後の3回分のみだからそうでもない。漢訳であり翻案を兼ねて創作まで混合させる。陳景韓はまことに奇妙な作品に仕立て上げた。 ㊦

人物表

有明	陳景韓	備考
徳島頼利	小林	日本陸軍予備中尉
バルテスコ (-) 〃 ボスキー 將軍	戈拔 (警察長) ×	警視總監、ワード嬢の敵 変名
マーガレット、ワード 〃 瓦徳嬢	瓦多 瓦多小姐	美人才女、スペイン人と称する日本人。伯爵の婚約者、警視總監に狙われる

●杉山藤次郎 埼玉県 東京神田区錦町の鈴木方に寄留

○杉山藤次郎『泰西政治学者列伝』鶴声社 明治15 (1882) .5.25。編輯人：埼玉県平民/杉山藤次郎/神田区錦町一丁目十番地/鈴木善之助方寄留

○杉山藤治郎(本文は藤次郎)『政談學術演説討論種本』秩山堂 明治16 (1883) .5。著述人：埼玉県平民/杉山藤治郎/神田区錦町一丁目十番地

→神田区五軒町に移転

○杉山藤次郎『黄金世界新説』今古堂 明治17 (1884) .3。著者：埼玉県平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地

●西村富次郎 東京府 京橋区幸町の高塚方に同居

○西村留吉『廓独案内』自由閣 明治16 (1883) .5.20、編輯兼出版人：東京府平民/西村留吉/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居(横田順彌「ぼくの調査力を自分で信じて発言するなら、これは杉山(藤次郎)が書いたものではないと断言してもいい」182頁)

〃 美佐子	美佐子	実は日本人某子爵とスペイン人の娘
アンドリー安徳理	×	ワード嬢の召使いと称する
ペーター	小厮	ワード嬢の召使い、小男
ミチイル	斯登	伯爵の使者
アルコス	亜立	伯爵の使者
×	古柏	伯爵の使者
伯爵	伯爵	露国皇帝の叔父、ワード嬢を正妻にすると騙す
オットー	×	金牌に服従する男
ゲタ	×	警視總監が雇ったワード嬢のための侍女
バルチヒ	×	警視總監の副官

【参考文献】

- 李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学 2005.4 2005届研究生博士学位論文
 国 蕊「近代翻譯文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓的転訳活動為例」『文学評論』2019年第1期 2019.1

【注】

- 1) 横田順彌『近代日本奇想小説史』ピラールプレス 2011.1.20
- 2) 杉山藤次郎と西村富次郎。奥付に住所を明記する書籍を列举する。主として国立国会図書館デジタルコレクション所収ほかによる

○西村富次郎『増補難波戦記』自由閣 明治18(1885).11、編集兼出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『絵本参考小栗実記』金盛堂、自由閣 明治18(1885).12、編集兼出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『草履打芸者達引』自由閣 明治19(1886).3、編集兼出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『国姓爺忠義伝』自由閣他 明治19(1886).12、編集兼出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『徳川天一坊実記』自由閣 明治19(1886).12、編集兼出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

●杉山藤次郎 神田区五軒町

○杉山藤次郎(奇正)『拿破崙軍談：通俗絵入』前橋書店明治19(1886).7、編次者：東京府平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎『午睡の夢：軍書狂夫』金桜堂 明治20(1887).2.3。著者：東京府平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎(南柯亭夢筆)『午睡の夢：軍書狂夫』金桜堂 明治20(1887).5.23再版。著者：東京府平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎(杉山蓋世、南柯亭夢筆)『豊臣再興記：仮年偉業』自由閣 明治20(1887).12。著者：東京府平民/杉山藤次郎/神田区五軒町三番地/●出版人：東京府平民/西村富次郎/京橋区南伝馬町一丁目八番地(自由閣と同一住所)

●奥付は西村富次郎 京橋区大鋸(おが)町 自由閣と同一住所

○蛟龍居士著述、夢遊居士校閲『不哲学』自由閣 明治21(1888).5.8。著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京府下京橋区大鋸町四番地

○大天狗哲想戯演、小天狗滑文筆記『滑稽哲学・雷笑演説』自由閣 明治21(1888).5.15。著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京府京橋区大鋸町四番地(近代書誌・近代画像データベース)

◎杉山藤次郎著、大天狗哲想戯演『滑稽哲学・雷笑演説』東京自由閣発兌 明治21(1888).5.15、著述兼発行人：西村富治郎

「書き入れ：見返し「表標題の字ハ久永其類[キエイ]の筆」「杉山藤次郎といふデモ作者の記本なり/署名の西村富次郎ハ出版屋の主人/当時これ位の原稿料ハ全篇にて七八円位なりと/杉藤より直接聴けり」「小林清親の画ハ二枚にて三円位の時価なりし(鉛筆書)蔵書印：水野(朱陽方印)本山彦一寄贈(近代書誌・近代画像データベース。画像なし)

○ブーランゼー著『一千八百七十年之侵寇史』自由閣 明治21(1888).5.13、著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京府京橋区大鋸町四番地

○俱礼(グレー)著、井上勤訳述『優勝劣敗：猿乃裁判』(発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地、福田栄造(略)) 明治21(1888).12.18

○蟠溪仙史『日本漫遊・外人膝栗毛』自由閣 明治21(1888).12。著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京府京橋区大鋸町四番地

◎(近代書誌・近代画像データベース。画像なし)に別物あり。阿部秀吉著/蟠溪仙史著/自由閣 明治21(1888).12。著述兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京府京橋区大鋸町四番地

○顛尾外(あごをはづし)変説、臍野宿替(へそのやどかへ)筆戯『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22(1889).3.8、著者兼発行者：東京府平民/西村富治郎/東京府京橋区大鋸町四番地

◎杉山藤次郎著『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22(1889).3、著述兼発行人：西村富治郎/発行元所在地：東京府京橋区大鋸町四番地「書き入れ：「実ハ杉山藤次郎記述」(鉛筆書・奥付)本山彦一寄贈(近代書誌・近代画像データベース。画像なし)

- 花のや紅『春色三ツ軒絵』自由閣 明治22(1889).6.25。著作兼発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地
- 花のや紅『恋路の迷』自由閣 明治22(1889).9.14。著者兼発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地
- 西村富次郎 京橋区大鋸(おが)町 自由閣、西村書店と同一住所—————
- 西村富次郎『生徒必携・子供教育演説』自由閣書店 明治23(1890)4.28。著者兼発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地(近代書誌・近代画像データベース)
- 西村天外道人『美人の艶説』自由閣書店 明治23(1890).6。著作兼発行者：東京府平民/西村富次郎/東京市京橋区大鋸町四番地
- 西村富次郎『少年教育明治孝子伝』西村書店 明治23(1890).7.21、著者兼発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地
- 西村富次郎『少年教育歴史はなし』西村書店 明治23(1890).8.23、著者兼発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区大鋸町四番地
- 京橋区新湊町 加藤勢喜方同居 弘文館と同一住所—————
- 西村天外道人『和漢泰西・古今学者列伝』弘文館 明治23(1890).12.11、発行者：東京府平民/西村富次郎/京橋区新湊町四丁目一番地加藤勢喜方同居
- 京橋区南伝馬町 弘文館と同一住所—————
- 西村天外道人編纂『日本立志編：偉業龜鑑』弘文館 明治27(1894).3.10。編輯兼発行者：西村富次郎/京橋区南伝馬町一丁目十四番地
- 有明山樵『大和撫子』50回、弘文館 明治28(1895).12.26。著作兼発行者：西村富次郎/東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地
- 採菊散人『復讐裏見刃』弘文館 明治29(1896).2.5。編輯兼発行者：西村富次郎/東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地(序は露の屋菊香記。やまと新聞に鶯の袖として連載)
- 有明山樵『探偵小説 伯爵と美人』50回、弘文館 明治30(1897).6.20。著作兼発行者：西村富次郎/東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地
- 微笑小史『桜田騒動』弘文館 明治30(1897).1.2。編輯兼発行者：西村富次郎/京橋区南伝馬町一丁目十四番地
- 日本橋区本石町 弘文館と同一住所—————
- 西村富次郎『日本偉人伝』弘文館 明治30(1897).11.4。著作兼発行者：西村富次郎/東京市日本橋区本石町三丁目七番地 国会図書館書誌情報は「西村富次郎(獲麟野史)著」とする。「獲麟野史識」あり
- 獲麟野史『二宮尊徳』弘文館 明治31(1898).10.25。著作者発行者：西村富次郎/東京市日本橋区本石町三丁目七番地
- 獲麟野史『平賀源内』弘文館 明治32(1899).2.7。著作兼発行者：西村富次郎/東京市日本橋区本石町三丁目七番地
- 礫川隠士編輯『日本新地理問答』弘文館 明治32(1899).11.25。編輯兼発行者：西村富次郎/東京市日本橋区本石町三丁目七番地

清末小説から

于 雷○催眠・騙局・隠喩——《山家奇遇》的未解之謎 『外国文学評論』2009年第2期

范 苓○明治“科学小説熱”与晚清翻譯——《海底旅行》中日訳本分析 『大連海事大学学报；社会科学版』2009年第3期 119-123頁 未見

夏 嵐○中国におけるシェイクスピア戯曲の翻譯と出版 『富山大学人文学部紀要』第51号 2009.8.31 電字版

崔 琦○吳禱の翻譯活動与日本《太陽雜誌》 『清華大学学报(哲学社会科学版)』2013年増1期(第28卷)、2013

—— ○顯克微支《灯台卒》在美日中的訳介与流

- 通 『中国比較文学』2019年第1期(総第114期)2019.1.20 電字版 ……………樽本照雄
- 夏 曉虹○梁啓超与晚清短篇小説の発生 『嶺南学報』2015年第1、2輯合刊 2015.3 電字版 ……………王 玉、梁 艶
- 王 岩岩○翻訳の歴史文化影響——以吳禱、周瘦鵑 The Californian's Tale の翻訳為例 『校園英語』2017年第14期「翻訳研究」2017.4.5 ……………樽本照雄
- 謝 柳春○晚清偵探小説翻訳与法治正義話語建構——以林紓訳《歇洛克奇案開場》為例 『福州大学学报・哲学社会科学版』2018年第6期 未見
- 魯道夫・瓦格納(RUDOLF G. WAGNER)著、賈如馨整理 ○重構「五四」:伝播、宣伝與国際行動者の作用 『東亜觀念史集刊』第16期2019.6/2020.11二版
- 楊聯芬、林少陽○作為方法的「五四」 『東亜觀念史集刊』第16期2019.6/2020.11二版
- 明 鳳英○「新」的光譜:晚清新小説の来龍去脈 『東亜觀念史集刊』第17期2019.12/2020.11二版
- 紀 蘭香○晚清“新小説”《文明小史》挿図中の三種視覚図景及其時代新変 『北京社会科学』2020年第5期 未見
- 馬 禎妮○当代形象学視角下《侠女奴》漢訳本研究 『外国語』2020.2(第43卷第2期) 未見
- 周維東+梁儀主編○『清末民初的青年文化与新文学』成都・巴蜀書社2020.9
- 趙 娟茹○『《繡像小説》的異域書写研究』成都・四川大學出版社2020.12 俗文学与俗文献研究叢書
- 劉 雲虹○文学翻訳批評事件与翻訳理論建構 『外国語』2021.1(第44卷第1期) 電字版
- 趙 陝君○《懷旧》発現史 『中国現代文学研究叢刊』202年第1期(総第258期)202.1.15
- 清末小説から 第137号 2020.4.1**
- いくたびかの阿英目録27 ……………樽本照雄
- 劉家公認の贋作『老殘遊記』 ……………神田一三
- 包天笑「空中戦争未来記」など(下) ……荒井由美
- 付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』について ……………樽本照雄
- ………樽本照雄
- 關於林訳小説口訳者力樹堂の一則材料 ……………王 玉、梁 艶
- 【再録】菊池幽芳『乳姉妹』の原作(速報) ……………樽本照雄
- 清末小説から
- 清末小説から 第138号 2020.7.1**
- 菊池幽芳『乳姉妹』の原作(誤解の系譜1) ……………樽本照雄
- 陳景韓の漢訳プーシキン(上) ……………荒井由美
- 清末《旅客》雑誌小説目録 ……………王 玉、梁 艶
- 清末小説から
- 清末小説から 第139号 2020.10.1**
- いくたびかの阿英目録28 ……………樽本照雄
- 『海外拾遺』の原作 ……………沢本香子
- 陳景韓の漢訳プーシキン(下) ……………荒井由美
- 漢訳クレイ『醋鴛鴦』の原作 ……………神田一三
- 『一束縁』と日訳『乳姉妹』(誤解の系譜2) ……………樽本照雄
- 談談林訳小説口訳者毛文鍾 ……………王 玉、梁 艶
- 清末小説から
- 清末小説から 第140号 2021.1.1**
- 林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造 ……………樽本照雄
- 莎士比原著『盜花』について ……………荒井由美
- 『紅涙影』の原作(誤解の系譜3) ……………樽本照雄
- 清末小説から
- 清末小説から 第141号 2021.4.1**
- いくたびかの阿英目録29 ……………樽本照雄
- 包天笑漢訳クレイ『空谷蘭』について ……………樽本照雄
- 涙香訳『野の花』の原作 ……………神田一三
- 漢訳『乳姉妹』について(誤解の系譜4完) ……………樽本照雄
- 陀思妥耶夫斯基小説漢譯佚忘四種 ……………古 二 徳
- 清末小説から
- 清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>**